

---

# 時の旅人

鏡花水月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時の旅人

### 【Zコード】

Z5932Z

### 【作者名】

鏡花水月

### 【あらすじ】

もし、力を持っていたら そうなつたら、どんなに良いことだろう？ そう願ったポケモンがいた。そのポケモンは、強さに執着し、その為なら、何することにも躊躇いを見せなかつた。そして、彼は自分という一個を引き換えに、限り無い力を手に入れた。だが、その時から始まつていた。崩壊は。

## プロローグ

人間とポケモンの共存の世界、また人間のみがこの世で猛威を振るう世界、そのような世界があるならポケモンのみが独自の文明を持つている世界も存在するのが世の理である。

そのポケモンだけの世界に住む者が、また今日も一日を迎えた。

地方区分はホウエン、街区分はキンセツシティの東区に建てられたポケモン屋敷。

ここはキンセツシティの自治組織の拠点であるとともにそこはの領主、アーサー卿の自宅である。

この広大な土地の中、また物語が生まれる

「ふわあ……」

ポッポのさえずりが聞こえる朝。イーブイのゼウスは目を覚ました。13歳とは思えないほど幼げな仕草と顔立ち。勿論ゼウス本人は自覚していない。

「ゼウス、起きたのか？」

横から幼馴染のピカチュウ、ジャードが話しかけてきた。こちらは仕草が少し老成している（顔立ちは13歳のもの）。

「うん、久しぶりによく寝たなあ

彼は鏡の前に立つと、尻尾についた寝ぐせを取り始めた。

「ふつ、最近は忙しかったからな

ジャードは頬の電気袋を軽くパチパチさせる。

「もう朝ご飯の時間じゃない?」

ゼウスはまだ眠い目を擦りながら部屋を出た。

「さて、飯を食いにいくか

「今日のメニューって何だっけ?」

「確かカレーライスかオムレツかうどんだったぞ」

廊下を歩きながら悪友と他愛もない会話を続ける。

ガチャリ

「ゼウス、ジャード、お早う」

食堂に入るとエルレイドである屋敷の主、アーサー卿が挨拶してきました。

「お早う御座います」

一人揃つて頭を下げる。

## プロローグ（後書き）

ゼウス : Zeus  
ジャード : J adu  
アーサー : Arthur

## Legend 1 もやか誘拐? (前書き)

ゼウス

「なんか作者をやさしくないタイトルですね」

まあね、

ゼウス

「まあねの一冊で済ますって……」

「ゼウス～早く遊びに行こ～うよ～」

まだ朝食を食べ終わらない僕を、ラルトスが促した。アーサー卿の愛娘、ルウムだ。僕達は“姫君”って呼んでいるけど。

「ズズズズ……ちょっと待つて下さい～」

「ゼウス……今更だが御前本当に食うのせえな。うどん一杯に30分かけてる奴俺始めて見たよ……」

幼馴染のジャードも呆れて頭に手を当てている。これも日常茶飯事なのだが。

「(ゴクゴクゴク)…………ふはあっ…… 御馳走様!」

うどんのつゆを飲み干した僕は勢いよく言つた。

「やつと食い終わったよ…………」

「じゃ、行きましょうか姫君」

僕はジャードの言葉など気に掛けずに歩き出した。

「ゼウスホントに味わって食べるんだね～そんなんじゃ、恋人とか出来たとき困っちゃうよ～？」

「ほ、ほつといて下さい！」

「こんな阿呆なイーブイに恋人なんて出来るわけないだろ」「ジャードだつて、そんなに性格が悪いんだから女の子からもてないんだよ?」

「五月蠅い！」

互いに罵倒しながら屋敷の廊下を外へと歩いていく。  
この屋敷での僕等の仕事は主に姫君の遊び相手。まあほつほつすき  
ていることが多いけど。

そしてその結果がこれだ。

「ほれ見ろ！ 御前がグートらやつてるから、姫君を見逃しちまつ  
たろうが！」

「そつちこそ、姫君から田を離して買い物に行くなんて最悪だよー。」

街の広場で僕とジャードは言いあいをしているが、誰も気には留め  
ない。イーブイとピカチュウの口論を見かけるのは珍しいことでは  
ないからだ。

「つて、こんなことしてる場合じや無いね。早く屋敷に戻ろつよ」

これ以上言い争つても不毛だし、早く屋敷に帰ろつとした。姫君も  
いるだろうじ。

だがジャードは……

「俺は姫君を探す」

「え？」

「今まで無かつたんだ、こんなことは。姫君がどつか行つちまつて  
も、その辺を搜せば普通に見つかっていたんだ」

「そ、それはもうお昼ご飯の時間だから帰つたとか、ちょっと好奇  
心を起こして遠くまで探検に行つたとかさ。ほら、いつもモモ吉や  
ん？」

「姫君はああ見えて気が弱い。好奇心如きで遠くに行く人じやねえ

ポケモン

よ。それに遊びに行ってる時に飯を理由に帰つたりしねえ。そんくらい分かるだろ?」

そう言つて走りだした。考えすぎだと思つんだけど……

「ルウム様なら帰つてきにないけど」

門の見張りをしていた、フライゴンのカインが言つた。

「朝君達と一緒に出たのを見たのが最後だね」

有り得ない!  そう思つた僕は街に向かつて走りだした。

「あの、すいません。 さつまじいで僕と口論してたピカチュウを見ませんでしたか?」

「え? 見てないわ  つてゼウスー?」

僕が話しかけたのは同じく幼馴染のミロバ、パフィーだった。

「な、なんだ、パフィーだったのか?」

「フフフフ、おかしかったわ  やたらかじこまつて、私に尋ねてあちやつてさあ」

「さ、気づかなかつたんだよー」

いつものことなんだけど、パフィーと話してるとよく分からぬい感情が生まれてくる。つてどうでもいいか。

「それより、ホントにジャード見てない？ 困つてんだよ」「何かあつたのね？ 話して」「うん、えっと」「

僕はルウム嬢疾走事件を簡単に説明した。

「分かったわ。じゃあテインとアステルも呼んで来るわ」「た、助かるよ！！」「私にここまでさせといいで、ただ迷子になつただけつてなら容赦しないからね！」「そこは普通、迷子で済んで良かつたつて思つべきだよねー？」「

「あーもう最悪だよ！ なんでこんなことになっちゃったんだ？」

ゼウスは走りながらブツブツ呟いた。アーサー卿の娘が拉致されたとなれば彼はその拉致した者を徹底的に攻め滅ぼすだろう、いや、自分は娘の守役なのだ。姫君を守れなかつたともなれば卿から仕置きを受ける可能性も十分にある。殴られる、蹴られる。最悪なのは解雇され、屋敷から追い出されること。それは避けなければならぬ。孤児のゼウスにとって世間は冷たいもの。幼くないとはいへ、まだ成熟していない彼が生きることは困難だろう。（実際はアーサー卿はそんな冷たいことはしない）

「「「うわあつ！」」

曲がり角でゼウスとジャードはぶつかりそうになつた。

「ジャード！ 姫君は見つかつた？」

「御前がそう言つてことは見つかつてないんだなー？ ちきしょう……やはり誘拐されたか……」

ジャードが頭を抱えて唸る。その時

『おーい、ゼウスーー！ ジャードーー！』

彼等を呼ぶ声が聞こえた。振り向いてみると、パフィーがブライゼルとスボニーを従えて走つて来ていた。

「三人共……」

「ルウムさんが連れ去られたんだな？」

ブイゼル……デインが唐突に聞いた。

「うん、今捜してるんだよ」

「私、怪しい人見たです」

その横からスボミー……アステルことアステリアーゼが有難い情報をくれた。

「どんな奴だつた？」

「4匹のごつい人達で、もじもじ動く袋を抱えてたです。近くの喫茶店に入つていつたです」

このスボミーは警察に通報したのだろうか。

「その喫茶店は何処？」

「この通りの一番向こうの『アーマルド』つてお店です」

「よし！ そこに行くぞ！」

ゼウス達は『アーマルド』と呼ばれた喫茶店へと走つていった。

## Legend:2 一大事（後書き）

パフィー: Puffy  
アステリアーぜ: Asteria  
デイン: Dane  
lyase

カラシロロン

「いらっしゃい」

ゼウス達が窓を開けると人の良さそうなアーマルドがいた。

（ホントにここなの？ その怪しい人達がいた場所って）

（間違ないです。ゴーリキーがモゴモゴ動く袋を抱えて入つてい  
つたです）

（なにこの何処かに奴らの隠れ家があるってことだ）

ゼウス達がヒソヒソ話しあつているのを見かねたのか、アーマルド  
がイライラしながら注意した。

「坊主共、入るなら入る、出るなら出るでハッキリしてくれんかね。  
客の迷惑になるよ」

「フン、客がいねえのに迷惑なんてこと

「あ、はい。上がらせて頂きます」

ジャードが余計なことを言つて出でないうちにゼウスが店の中のテー  
ブルの椅子に座つた。

暫くして、メモを持つたアーマルドが来た。

「注文は決まつたかい？」  
「はい。僕はエクレアで」  
「俺はレモンティーだ」  
「アタシはマドレーヌ

「……オレンジジューク  
「私はチーズケーキです」

それぞれオーダーを叫うと、アーマルドは奥に戻つて行つた。

「……さて、捜索の時間だな」

ジャードが唇の端を軽く持ち上げて叫う。

「ジャード、まさか……」

「ふつ、そのままかだ。あのマスターがいない間にこの辺をあやく  
りまくる。幸いなことに閑古鳥だしな。デイン、あのアーマルドが  
戻つてきたら伝えてくれ」

「……ああ」

彼等はテーブルを離れると、怪しい場所を探り始めた。

「うーん……扉は……床には無いのかなあ……」

「あら 可愛いお花 家に持つて帰りたいわあ ..... あら  
？」

「おいパフイー、何処搜してんだ」

「ねえ、これ鍵じゃないかしら？」

「何い！？」

「モゴモゴ」

思わず叫びそうになつた といつより叫んでしまつたジャード  
の口をゼウスが押さえる。彼の声は透き通つてゐるため、普通に話  
していくても聞かれているかもしれないのだ。

「もう、あの人にはれちゃつたらお終いなんだからねー」  
「あ、ああすまん……それよりその鍵を見させてくれ」

「はい？」

パフィーがジャードに銀色の鋭利物を差しだした。

「隠されていたところが怪しいな…………なんか鍵穴のような

」

「待たせたな」

そこでアーマルドがおぼんを持って登場したので搜索は断念

「おっと足が滑った

「つわおつーっ！」

されなかつた。アーマルドの方は後頭部を強打して気絶したが、注文の品が乗つたおぼんはパフィーがキヤッチしたため無事だつた。

「ジャード姑息すぎだよ…………

「そう言つぜウスもエクレア食つてんじやねえか」

そして搜索を続ける」と一〇分

「う……う……

「…………まよい、マスターが起きる」

それまで黙つてアーマルドを見張つていたデインが口を開いた

「お、俺はいつたブギヤッ！？」

今度はゼウスがアイアンテールを浴びせ、また眠りに落とした。

「あ？ これ鍵穴ではないですか？」

その時、アステリアーゼ、通称アステルが、スボニー特異の頭の薔をパタパタさせながら声をあげた。

全員（デインはアーマルドに注意を向けながら）アステルがさした場所を見る。確かに、床の色と一致していて分かりにくいが、鍵穴らしきものがあった。

「ああ、面白いほど厳重にカモフラージュしてあるしな、間違いない。んじゃここにこの鍵を」

ガチャ

無機質な金属音が響き、今まで何もないと思っていたところに地下へと続く階段が現れた。

五人とも音を立てずに入つていった。だがしんがりのデインが扉を閉めているとき

「お、御前ら、何やつてんだ！」

上ずつた声と共にデインの体が上方に引き上げられた。

「あ、あぶねえ！」  
「頑張つて！」

ゼウスとジャードが同時にデインに捕まる。

「私達も手伝うです」

「もつつ… 仕方ないわね！」

アステルとパフイーもしがみついた。

いまや彼等は暗い縦穴の中で宙吊り状態だ。デインが掴んでいる扉は、向かいでアーマルドが、五人の体重に抵抗しながら必至に開けようとしているのが分かる。

「…………」

ジャーデはその力で不規則に上下に動く扉を見て何かを思いついたようだ。

「デイン、もう戻りぞ。手を離せ」

「…………」

彼が言い終わるか言い終わらないか、ゼウス達の体は縦穴の中をまっせかさまに落ちていった。

「ふう、全員無事で何よりだ」

ジャーデが黄色い尻尾をさすりながら言った。

「だからって落とすことはないよ」

「…………俺の手のことも考える」

ゼウスとデインが反論した。因みにアーマルドは

「…………」

頭部に巨大な瘤を作り悶絶していた。どうやら彼等の抵抗が無くなつた故に、反動で勢いよく扉を開けてしまい、一緒に体ものけ反つて……本日3度目の頭部強打となつたのだ。

「でも地下に基地を作るなんて……ただ事じゃないよね」

ゼウスが辺りを見渡す。無機質な通路が続いていた。

## Legend: 3 頭碎（後書き）

ゼウス

「タイトルあのマスターにしか関係ないじゃないですか」

まあ面白いからね

ゼウス

「いや面白くもなんともないし」

## Legend:4 ワープ

「うげつ！？ ししし侵入者だあつ！」

正面から歩いてきた一匹のスリープがすつとんきょううな声をあげた。

「ちつ、気づかれた」

「問題ないよ、シャドーボール！！」

ゼウスはスリープに向かつて邪悪な魂を放つた。突然の不意打ちに、避けられなかつた彼は、もろにシャドーボールを喰らうと、逃げて行つた。

「逃がさねえ。電撃波！」

そのスリープに、俺が必中の電気を放ち、スリープは倒れた。

「……俺達が侵入していることを知られたら困るからな。御前に恨みはないんだが」

俺はスリープに吐き捨てる、進んでいった。俺達の存在が気づかれてなければ良いが……

彼等がいる部屋とは別の部屋で、団体の大きい何かが、映像に映されたゼウス達を見ていた

「侵入者か…………厄介だな。…………ネイビス、奴らを始末してこい」

「はっ」

暗い声の命令に、トーンの高い声が勇ましく返答した。そのままネイビスと呼ばれた影は部屋の片隅に歩いていくと、突然姿を消した。

「あれ？ ジャード、これワープパネルじゃない？」

「何？」

俺はゼウスが差したオレンジ色の床を見つめた。そうしていふと……

ギュイイイイイイイイイ

「え？」

俺は、不意に変な感覚に襲われた。いや、俺だけでは無いようだ。ゼウスやアステルも分からぬ顔をしている。後で「サイコキネシス」と呟く声がしないような気がしなくもない。

そのまま、全員ワープパネルに乗せられ。4次元の中を移動していくつた

「うわあっ――――――！」

「ヴ・ヴ・ン

気がつくと、闘技場のよつた部屋にいた。

## Legend:4 ワープ（後書き）

ゼウス

「あの、ワープパネルって何？的な人もいるんじゃないでしょうか

……

それについては次話で説明します

## Legend 5 ゼウスの実力（前書き）

ゼウス

「分かり安過ぎるタイトルですね」

まあ良いじゃん良いじゃん。

## Legend 5 ゼウスの実力

「ちきしじゅう……サイロキネシスでワープパネルまで持つていつて俺達を強制移動させるとはな……」

横からジャードが咳いた。

それより、ここはどこ？ って言いたいんだけど。あ、ワープパネルって何？的な人の為に言つておきますね。踏んだら一定の場所に、名前通りワープさせられる床です。まあ、団のアジトにあるあのオレンジ色の床、あれと同じだと思つて下さい。

「…………ゼウス」

突然よこからティインが呼んできた。

「…………敵の気配がする」

「えー？」

まさか…………そう思つて辺りを見渡すと、何もない空間に敵が落ちてきた。

「ラッタ、イトマル、ビッパ

雑魚ばっかじゃないんだよね

「敵か…………厄介だな」

「でも、そんなこと言つてる場合じゃないんだよね

っ

ヒー！」

前方からパラスがひつ搔くを仕掛けってきた。

僕は、ジャンプしてかわす。このままだと後にいるティインに当たつ

ちやうけど……

「グエ！？」

その前にパラスを踏みつけた。

次は横から襲つてくるコラッタかな……それじゃこのままジャンプして……

「アイアンテール！」

「コラッタを吹つ飛ばした。そのまま彼は地面にぐ地面上にいたパラスにぶつかつた。これで二匹片付いたね。

「空手チョップ！」

「切り裂く！」

次はジャードが処理中のワンリキーとコロトックかな。電光石火一撃で倒れそうだ。

「ちつ……厄介な奴らだ……」

「ジャード、今行くよー！」

僕は親友に叫ぶと体の力を抜いた。

「電光石火！」

刹那、コロトックとワンリキーが倒れ伏す。次は……

「ちょっと、アンタ達寄らないでよー！」

パフイー達を襲っているイトマル軍団だ。  
僕は茶色い掌を向かい合わせた。

「オオオオオオ

掌と掌が向かい合つ中に顯れた紫色の球体 シャドーボールを放つ。殆ど吹き飛ばせたけど、まだ残つていたようだ。

「ぐ……このイーブイ、なかなかやるな……」「作戦変更だ。」  
「イツからやる

イトマル軍の残党3匹が僕を取り囲んだ。馬鹿だなあこのポケモン  
達

「え、えっと……痺れ粉！」  
「いいつー？」

アステルの黄色の粉が一匹を痺れさせた。

「飛び蹴りいつ！」

そのままパフイーの技でノックダウンする。

「お……おい、やっぱくねえか？」  
「仕方ねえ！ こうなつたら玉碎だ！」  
「りょうか」「  
「電光石火」

イトマル一匹が僕に飛びかかってきたけど、その瞬間僕は彼等の後

にいた。イトマル達が地面に倒れ悶絶する。

「……水鉄砲」

デインの技がオタチをく・ろ・す。これで終わりだ。

『君達、なかなかやるな』

「――――――！」

いきなり聞こえてきた高い声に体を硬くする。

「だ、誰だ！ 隠れてねえで出て来い！」

「はつはつは。威勢が良いな。もっとも僕は君らの後にいるんだけ

ど

「！？」

僕等が後を向くと、フードインがいた。

「フードイン……Hスパートタイプ……まさかサイコキネシスで俺達をここに移動させたのも御前か？」

「御名答。察しが良いねえ君。そんなに頭がいいならここに来るなんて愚かなことは止した方が良いんじゃないかい？」

「ほやくな。俺達はこのままでは帰れねえんだ」

ジャードとフードインの会話が続く。その交渉も佳境に達した

「この部屋のワープパネルは電源を切つてある。この鍵がないと開けられないよ。まあ、このネイビスに勝てばあげるけど」

と、銀色の鍵をちらつかせた。このまま先に進むにはこのネイビス

つてポケモンを倒さないといけないみたいだね……

「ジャード、ここからの交渉は任せて」

「ああ、負けたりなんかすんなよ」

ジャードの言葉に軽く頷くと、体に力を溜めた。体の中から光が発せられるのが分かる。

「？ 君が僕の相手

「切り札」

僕を包んだ光はネイビスを吹つ飛ばした。地面に倒れた彼は動かなくなる。

「よし、鍵はちゃんと取つたぜ」

ジャードが鍵をクルクル回しながら部屋の機能制御装置に差し込む。数秒後、ピーという電子音が鳴り、

『I'Dを読み取りました。ワープパネルを開放します』

といつ無機質な声が響いた。

「よし、じゃあ行くか」

「ちよつと待つて」

僕はワープパネルを踏もうとしたジャードを呼び止めた。

「？ どうしたんだゼウス？」

「行く必要は無いよ」

そして落ち着きはらつたように言った。多分あの人も仕事は終わつてんじやないかな。

「え？ なんでだよ？」

「もうすぐ来る筈だよ。僕達は囮だつたんだから

「！？」

待つのは永くなかった。数分後にワープパネルが反応し、リオルとラルトスのペアが現れた。リオルは僕を見て言った。

「ミッションクリア  
任務完了だ」

## Legend: フォース・チェンジ（前書き）

さて、今回新キャラが出来ます。

ゼウス

「前回出てきたあのリオルですね？」

うみゅ。彼はポケモン屋敷に召し抱えられている忍者なんだよ

ゼウス

「ふーん」

あと、有り得ない技を使ってたり。まあ本編で色々設定を書いてるけど。

## Legend: フォース・チェンジ

「レンさん？ どうしているんだよ？」

ジャードが疑問顔で尋ねた。レンと呼ばれたりオルは真顔で答える。

「ゼウスが来て欲しいって言つてたんだよ」

「ゼウス？ いつの間に……」

「あの時、屋敷に帰つていた時だよ」

ジャードが驚いたような顔をした。

そのまま沈黙が流れたが、パフィーがそれを破つた。

「ルウムちゃんも助かつたし、いいんじゃない？ セツセツと帰りま  
しょう」

彼女はせつ言つと、ゼウスの背中を押していった。

「ははっ、元気な嬢ちゃん達だな」

レンが微笑して呟く。

「あ、テメエらー。」

帰り道、彼等は喫茶店主、アーマルドと鉢合わせしてしまったようだ。

「厄介な奴だな……俺が倒そつか」

レンはそう言って盾を退かせると、アーマルドの方へと歩み寄つていった。

「あー？ テメエが俺の敵か

「テレポート」

その瞬間、レンの姿が強き消えた。レンがテレポートを使った。そこまでは良いのだが、一つ気にかかることがある。リオルはテレポートを覚えないのだ。

「瓦割り」

「ドゴオツー！」

突如、轟音と共にアーマルドが痙攣した。そのまま倒れていいく。

「ちよ、ちよっとおー！？ なんでただのリオルがテレポートなんか使えるんのよー？」

「た、ただのリオルじゃないってことですか」

あまりの展開の速さについていけないパフィーとアステルが慌てふためく。

「さうだ、俺はただのリオルじゃないってことだ

倒れたアーマルドの後でレンが爽やかに笑つて言つ。

「…………説明は後、とりあえず脱出

その時今まで黙っていたテインが口を挟んだ。

「うん。早く行け」

ゼウス達は歩き出した。

「で、レンさん？ わたしのトレポートのこと、教えてくれない？」

『アーマルド』とは別の喫茶店で紅茶をすすりながらパфиーが言った。

「ああ、あれは<sup>フォース・チエンジ</sup>術式変換技といつものだ」

「「「「術式変換技？」」「」「」

レン、ゼウス以外の者が声を揃える。

「技の能力、威力を科学技術で組み替えるんだ」

ゼウスがレンに代わって説明を始めた。

「例えばレンさんのテレビ。本来リオルはそんな技覚えないけど、レンさんのテレビは技の性質を変換しているからリオルでも使えるんだよ」

全員が頷いた。パфиーはゼウスの示唆する「」ことが理解できず、首をかしげている。

「じゃあゼウスの切り札も<sup>フォース・チエンジ</sup>術式変換技ですか？」

その時、アステルが口を挟んだ。

「え？」

「私みてて思つたんです。切り札つて、技を出す前に他の技を何回も出してないとそこまで強くならないじゃないですか。でも、あの時ゼウスが出した切り札はあまり技を出したわけじゃないのにかなり威力が高かつたです」

「そう言えば……」

「わ、私もおかしいつて思つたのよ」

「絶対嘘だよね。君切り札つて技自体知らなかつたんじやない？」

ゼウスの一言にパフィーの顔がひきつる。

たしかにパフィーは知らなかつたとておかしくないだろ？

彼はパフィーの表情など気にせずアステルの質問に答えた。

「当たり。僕の切り札も<sup>フォース・チエンジ</sup>術式変換技だよ」

彼女の疑問は見事に当たつていた。

「だが、<sup>フォース・チエンジ</sup>術式変換技には欠点があるんだ」

馬鹿にされ無視され怒心頭のパフィーがゼウスに殴りかかるうとするのをレンが止め、言った。

「例えば俺のテレポートはスタミナを大きく消費するとか、ゼウスの切り札は相手に与えたダメージの反動がくるとか。使い方を間違えると、死に至ることもあるんだ」

「じゃあ、ゼウスはなんでそんな危ない技を覚えたの？」「

ルウムの言葉に全員が疑問を抱く。ゼウスはなんとか誤魔化そうとしたが……

「ああ、いや生まれつきの

「

「嘘だな。例え親が術式変換技を持つてもそれが遺伝で子に映ることはないんだ」

出来なかつた。

「術式変換技を習得するには専用の技マシンがないとできないんだ。研究所が技の情報を書き換えて、それを技マシンに挿入するんだ」

ゼウスの顔に『余計なことを……』を書いてあるのが分かる。

「へえ……ゼウスがわざわざそんなものを覚えるなんておかしいな……『イツの実力だとわざわざ覚えなくても大抵の相手に勝てるんだからな」

ゼウスは今更ながらに自分の実力を呪った。秘密を言つながら自分の過去も明かさなければならない。

別に隠すことではない。ただ同情されたくないだけなのだ。

「…………べ、別に、ただもっと強くなりたいってだけで……」

彼は答えた。だが、どう見ても拳動不審だ。怪しい。

「ゼウス、辛そうな顔してるです。言つたほうが気分が楽になるかもしねないです」

アステルが優しく言いかけた。だが……

「ほ、本当に何もないんだって！」

彼は声を荒げて黙ってしまった。

「えーと……だから、そうするにはポケモンの性質を変えればいいのね？」

「…………何故か、俺の言ったことが全く別のことに受け取られてる…………」

因みにデインは話の内容が全く理解できないパフイーと頭脳的な格闘を強いられていた。

## Legend:6 フォース・チエンジ（後書き）

新キャラ登場で～っす

レン

「よりしへお願い申し上げます」

まあ余談なんですが、彼がテレポートをえる理由としては、忍者の仕事でテレポートとかできたら便利だよなあ……とか

レン

「それが由来なのか？ ならもうひとつと強い技にして欲しかったな」

まあ他の技が電光石火、はっけい、影分身であ、本当に忍者みたいよ。

## Legend:7 悲しい記憶（前書き）

ゼウス

「前話のも含めて何があるか容易に予想できるタイトルですね」

「うん。その通り。ゼウスの過去だけど、かなり悲惨な」とになつて  
るよ。

ゼウス

「そうじゃないと僕が拒む理由がないんじや…………

確かにね

## Legend: 7 悲しい記憶

「なあ、ゼウス。何故御前は術式変換技を「それ以上言つたら切り札を放つけど」

ゼウスの鋭い視線に刺されて俺は口をつぐんだ。

「聞かない方が良いかな?」

ポケモン屋敷の忍び、レンさんが優しく言つた。  
今日俺達を助けてくれたが、その代償に仕事をほっぽり出してきた  
らしい。

流石に酷過ぎんだろう。

「もう就寝の時間だな。それじゃお休み

「ああ

「お休みなさい」

俺達は口を揃えて挨拶をした。

「済まねえなゼウス。俺はただ的好奇心で御前のことを探りたい訳  
じゃねえ。ただ、親友として御前の悲しみを和らげてやりたいんだ

真夜中。

ゼウスが寝たのを確認すると俺は彼に向かって柔らかな光を放つた。

それは寝息で規則正しく動くゼウスを包み込んだ。  
俺の特殊な力“時空超越”<sup>タイム・リワインド</sup>の一つ“別時元再生”<sup>タイム・リプロダクト</sup>だ。

「…………！」

光は一つの光景を展開した。

見知らぬ街道、

そこを大勢のポケモンの集団が隊列を組んで行進している。  
隊列の先頭には一匹のブースターがいる。

「デービス様、我々は諦めません」

ブースターは大きな館の前まで来た。

アーサー卿のポケモン屋敷の10倍はあるだろう。  
そこでブースターは叫んだ。

館からデービスと呼ばれたドサイドンが現れる。

「なんだフレア。休日の口にまでここに来て減税を訴えるつもりか  
？」

「消費税65%は多すぎです。我らとて感情はあります。悲しみも  
感じるし、痛みも覚えます」

「ダメだダメだ！ 我が領は領主の命は絶対なのだ！」

デービスが声を張り上げる。

すると、フレアについてきていたポケモン達は耐えきれなくなつた

のか、叫び出した。

「ふざけんじやねえ……………こんなに税金絞りあげられて生きていけるか……………」

「私達にも生きていく権利はあるのだ……………」

「税率を下げる……………」

「やがましい……者共、かかれえ……………」

デービスが叫ぶと、館から護衛のポケモン達が現れ、フレアに従つていたポケモン達を攻撃し始めた。

フレアも攻撃は受けたが、なんとか逃げることが出来た。

「御帰りなさい父さん、大変だったでしょう?」

「貴方、そんなに気を落としちゃダメよ?」

フレアが家に帰ると彼の娘であるグレイシア、妻であるシャワーズが玄関まで迎えに来ていた。

「その声はマキとアクアか。ああ、また1%も下げて貰えなかつた

フレアが娘のグレイシア                   マキと、妻のシャワーズ

アクアに答えると、シュンとする。

彼が住むミシロタウンはあのデービスというドサイドンが領主（江戸時代の大名とか、そんな感じのです）を務めている。

先の騒動でもあつたが税率は65%。高すぎる数字である。

当然町民も黙つていないのである。彼等は税率を下げるよう命じた。

フレアを筆頭に、デービスの館まで押し掛けたのだ。  
後はさつきの通りである。しかもフレアの言葉から察するにこれが始めてでは無いらしい。

「姉さん、父さん帰つてきたの？」

廊下の影から一匹の幼いイーブイがヒョコ、という効果音が似合い  
そうな動きで現れた。

マキの弟のようである。

「ゼウスか、只今」

フレアはイーブイの息子 ゼウスに微笑みを返した。  
が、すぐにやつれたような表情を浮かべ、自分の部屋に去つて行つ  
た。

「姉さん、父さんまたダメだったの？」

「そうみたいね。でも明日またチャンスはあるわ」

「マキはゼウスに言つた。だが、ミシロタウンで起きるテモは今日が  
最後だつたのだ。

「デービス様、控訴に来る奴等……どんどん数を増してありますが」

館の一室で、ダーテングが報告した。

「更に……数日前、レンが掴んだ情報によればフレアは反乱軍を集め  
て、革命を目論んでいるのです」

「もういい。アソツを……サイズを送り込め。これでフレアも終  
わりだ」

「はつ

「ムニコ……」

「！？」

ゼウスが寝がえりを打ち、すぐ側にいたグライオンが息を潜める。

「なんだ、寝返りか。びっくりさせやがる……コイツもだが、ま  
ずはこのクソブースターからだ」

彼は冷や汗をかきながら標的コンピュントを合わせる。

その時！

「父さん、危ない！」

パチッ！

マキの甲高い声が響き、部屋の明かりがついた。

「！？ マズッ……」

存在を氣づかれ、焦ったグライオンはフレアに当たつて、つむりの大地  
の力を外してしまった。

だが

ちつ、外した？ いや、外れてない！ 奴の嫁に当たつている！  
本当はフレアからやつちまいたかつたんだが、コイツから殺しても  
いいだろ？！

「ああつー、母さん！」

ゼウスが悲痛な声をあげる。ゼウスの母、アクアは大地の力による根っこで心臓を貫かれ、絶命していた。

なんで殺されなきやいけないの！ 何も…… 何も悪いことはしていないのに！

彼は目から涙を流した。それがもう一つの致命傷だった。

「危ない！」

父のフレアが叫んだ。

ゼウスが気づいた時には遅かった。根っこは目前まで迫ってきていた。

もう逃げられない！

彼は死を覚悟し、目を瞑った。

だが、いつまでたっても体は無事のままだ。

「？……」

不審に思つた彼は目を開けた。するとそこに飛び込んできた光景は

「と、父さん！」

息子を庇い絶命した父、フレアの姿だった。

彼は恐怖に口を開いたまま、動くことが出来なかつた。

「ゼウス！ 逃げるわよー！」

マキはさつまつて弟の前足をとると家から飛び出した。  
だが……

「逃がすなあっー。」

『おお…………っ…………』

グライオンが手配していたのか、多数のポケモンが迫つてくれる。彼等は次々に逃げ道を塞がれ、やがて崖際に追い詰められた。

「はつはつは。後はこいつ等を殺れば終わりだ…………」

グライオンが邪悪な笑みを浮かべて一步、また一步と歩み寄つてくれる。

目の前には自分達の命を狙う刺客、周りには自分達を逃がすまいと構えているゴツいポケモン達。そして後には急流の川。ゼウスとマキは絶望的な状況に陥つた。

後の川に飛び込むという手段もあるが、ゼウスにはそこまでの勇気はない。

「ゼウス、良い？ セーので飛び込むのよ？」

「や、やだ！ 怖いよ！」

「甘つたれた」と言わないのー。このまま死ぬ方がいいのー？

「う…………」

「父さんは貴方を庇つて死んだのよ！ ならこじでゼウスが死んじゃつたら、父さんはなんのために死んだのよー。」

ゼウスの顔に曇りが見られた。

「何をこじかこじかと言つてんだ！ 死ねえっー。」

グライオンがシザークロスを放つた！

「ゼえのー。」

ゼウスはマキの掛け声に叫わせ、後にジャンプした。  
シザークロスは彼の尾を掠めて飛んで行つた。

「…………？」

ゼウスは田を覚ました。

周りは知らない森、生きていることだけは確認できた。だが……

「…………姉…………さん？」

マキの姿が見つからない。

「姉さんっ！姉さん！何処…………？」

彼はマキの呼称を呼びながら駆け回つた。  
だがその声は尻すぼみになつていつた。  
暗い森が怖くなつたのだ。

「「…………つわああああああつー」

彼は泣きじゃくつながら闇雲に駆け回つた。  
運よく、街道に出た。

(………… ジ…… は…… ド…… だ…… エウ…… )

ゼウスの意識は途絶えそうになっていた。

永い間歩き続け、耐えられなくなつたらしい。

ゼウスはキンセツシティの一歩手前で力尽きた。

『何よ、急に呼び出して～』

『ああ、悪いが協力して欲しい』

『………… 何があつた?』

『一大事ですか?』

そして8年経つた。幼かつたゼウスも、そこで知り合つた友人達が幼馴染と言えるほど成長し、今ではキンセツシティのポケモン屋敷で働いている。

そんなとき、ゼウスはある人に出会つた。

「へーイー！ そこの兄ちゃん、これ知つてまあーすかあーい？」

変な訛りの言葉使いでバシャーモ<sup>フォース・チエンジ</sup>が話しかけてきた。見ると技マシンを持つている。

「何?」

ゼウスはその技マシンを見つめた。

「これはですねー、<sup>フォース・チエンジ</sup>術式変換技といつてえー。普通の技を強化したものでえー、とつても強くなれーるものなんでえーすよ」

とても強く、とつう言葉にゼウスは反応した。

「この中にはあー、切り札つて技が入つてえー、普通ならあー技を出さないとおー、しょぼーい威力なんだけどおー、この中の切り札はあー、しょっぱなから使つてもおー、ベリイベリイベリグレードな威力なんだあーよおー」

「それ下さい」

ゼウスに迷う予知は無かつた。

あのとき、僕が強かつたら……父さんも母さんも死ぬことはなかつたんだ

強さへの執念が、彼にはあつたのだ。

「おおーっ、ありがとーっ、じこまああーすー、5000ポケになりましたーすー、ああーっと、わすれてたあーー、その術式変換技はあー、相手に与えたダメエエージのフイードバックがありますのおーで気をつけてくうーださああーい」

彼は技マシンの代金を払つと、早速効果が書き換えられ、強化された切り札を獲得した。

「……成る程な」

俺は術を解くと、ベッドに寝転がつた。

憶測だが、アイツは同情されるのが嫌でこんなことを話さないんだろ？

今日見たことは誰にも話さない。

これから、アイツに優しくしてやるうかな……

そう想いながら俺は眠りについた。だが……

「ゼウス！ テメエ俺の肉じゃが食いやがったな！」「ジャーダー！ そ僕のシチュー食べかけやつたじゃない……！」

朝っぱらから口喧嘩。

俺がアイツに優しくするなんて一生ないだろ？

『e 番号 2007 悲しき記憶（後書き）

ジャード

「おい、最後のあれなんだよ」

いぐりなんでも悲惨あわらばかりねえ。やつぱつオチをつかみつ、みたいな?

ジャード

「御前な……親友の概念が崩れてくるだらうが……」

「はあ…… よりによつてこんな物が来るとはねえ……」

レンが暗い倉庫の中のよつな部屋の中で溜息を吐いた。  
ここはポケモン屋敷の屋根裏であつたりもする。

「とりあえずこれを卿に届けないとな…… よいしょつと」

彼は独り言を呟くといきなり姿を消した。  
色々不審点があるが、忍者なので仕方ない。

「屋敷にこんな物が?」

温厚で人柄の良いエルレイドで、ポケモン屋敷の主人でもあるアーサーが一枚の紙を見て佇んでいた。

「卿、俺が一肌脱ぎましようか」  
「ああ、頼むよ」

それから1~2時間が経つた。

あけもどりと共に始まる日常的な一日が

「昨日、怪盗から予告状が届いた

「ええつー!？」

アーサー卿の予想外の言葉に崩された。

「え、今こりでありますかー？」

屋敷の家臣の一人、ルカリオのハントがすつ頬狂な声をあげた。

「どういいうことも何も無いさ。この屋敷の宝石“ラピスラズリ”を盗むと怪盗が言つているんだ。私達もそれなりの御持て成しをしようではないか」

アーサーはそう言って爽やかにほほ笑んだ。

「…………怪盗、ですか。そうですね。この予告状の主、怪盗・Rに牢獄への招待券をプレゼントしましょう!」

セウスが元気よく言った。  
アーサー卿が返す。

「ああ、では皆、予告状に指定されてある夜中12時になつたらこの広場に集まるんだ。怪盗・Rの狙い目、ラピスラズリはここに置いておく」

アーサーは既に指示を出すと、群青色と銀色のコラボマッチ、星満点の夜空をこの一点に凝縮したような石・ラピスラズリを食堂の真ん中の鳥ポケモンの石像の足元に置いた。

この後は皆が食事しながら談笑する日常的な光景があつた。

「怪盗Rって何処のどんな奴んだろうなあ…………」

「わあな、どうあえず日本からじき食いつける权限をもつて活動かせ」

「Rって言うからラ行で始まるポケモンだよね」「そうじやねえの? まらどつとと食え。伸びるだらうがー

「ラ行で始まるのは……ラムパルド、ルナトーン、ルンパッパ……」

「早く食えってのったく……」

ジャーデは段々苛ついてきて、貧弱振りを始めた。

「ん？ パフィー達はどうしたんだ？」

ゼウスはローリングビーンの汁をやつと飲み干し、キンセシシティの広場までアーサー卿の愛娘・ルウムを連れてきていたジャードが周りを見渡し、ある異変に気づく。

「ああ、今日は学校の行事で遠足があるんだつしを」「ふん、学校か……良くなあ、親のいる奴は……」

ジャードには哀愁が漂い、ゼウスは悲痛な面持ちを浮かべた。とてもルウムがいる雰囲気とは思えない。そのルウムがゼウスをつづつこて言つた。

「ねえ、怪盗つて何～？」

びつやう先程のアーサーの話を聞いて疑問に思つたようだ。

「ん？ 怪盗を知らんのか？ 怪盗つてのはな、普通のポケモンが思いつかない方法でお宝を盗むのを職業にしてる奴のことを言つんだ。頭がよくねえと出来ねえことだが、犯罪者であるのに変わりはないねえ」

「ふ～ん、凄いねえ～」

ジャーデの説明にルウムが感嘆の声をあげている。

タメ口だがあまり気にしない。

ついでに言つとジャーデはアーサー卿にもタメ口だが、彼も気にしている。

「犯罪者なら、その怪盗さんを捕まえに行ひよへ」

「はい！」

その時、ルウムがとんでもないことを言い出した。

その怪盗が殺しあしない主義なら構わないが、必要とあれば殺す者なら困る。

その怪盗Rがどのような者かすらも不明なのだ。

ゼウスは止めようとした、が……

「ねえ～早く早く～」

「い、いや、危け

」

「行こうよ～」

「姫君、行きたいのは分か

」

「行きたい～」

ルウムは梃子でも動かない、という構えだ。

埒があかない、と思つたのかゼウスはジャーデに耳打ちした。

(良いじゃない？ 適当に探して暇つぶしでもしておいたほうが)  
(んん～？ だがあの様子だと見つけるまで帰らないって感じだぞ  
?)

(じゃあこのまま姫君と交渉して時間を潰すとか  
(お、それいいな)

意見がまとまつた一匹がルウムとの交渉を開始

「ね、ねえ姫君、危ないですから

「うん、じゃあこーー！」

「

する前にルウムが動き出してしまつた。

流石のジャードも止められず、結局2匹はルウムの怪盗探しに付き合つ運びとなつた。

「ゼウス、姫君から田え離すなよ。この前は酷い田に遭つたんだから

「

「ジャードのせこでもあるんだけどね

2時間後、ルウムは“そこまで込み入った場所は探さないだろ”  
とこう2匹の浅はかな思い込みを凌駕し、命の危険が及ぶ可能性のある場所へどんどん一匹を引き込んでいた。

「熱いね～

「

「…………」

3匹はキンセッシティをずっと北に上がつた先にある煙突口に來ていた。

その時、ルウムが屈みこんで何かを拾つていた。

「？姫君、それは……？」

「ん～？見てこれ～。私が持つてると同じ～」

彼女はそう言つて2つのペンダントを取り出した。

紐の長さ、ペンダントの形、更にペイントされてある漆黒の剣の紋章のマークも、全て一致している。

「？ 姫君、これをどこで拾った？」

「ん～とね、こつちは今ここで、もつの方は昨日捕まつた時に牢屋の中で拾つたんだ～」

ルウムの言葉に、口は驚愕の色を顔に浮かべた。

「この剣の紋章は…………暗黒の剣！ 奴等が…………ここでも活動していたのか！？」

「いや、このペンダントは比較的新しいよ。多分今も活動中

「

ゼウスがそこまで言つた時、彼等の背筋を凍らせる声があがつた。

『侵入者発見！ 侵入者発見！ 直ちに排除せよ！』

「了解！」

バタバタと、周囲から多数のポケモン達が飛び出し、彼等を取り囲んだ。

「わー凄ーい

「んーつたく、<sup>ポケモン</sup>人の苦労も知らずに呑気なこと言いやがつて」

ジャードは悪態を吐くが、その顔は何処となく笑っていた。

ゼウスが周囲のポケモン達を見下したよつと笑つて。

「まあ勝てばいいんだよね？ こんな雑魚共なら普通に勝てるよ」

「てつ、テメエ！　俺達をなめてん

ギピー？」

そのポケモンの頭領と思しき者、ポチエナが吠えた。  
が、その途中でゼウスのアイアンテールの餌食となつた。

「はつはー！　ゼウス、やられんなよ？」

「勿論」

ゼウスとジャードにポケモン達が躍りかかり、大乱闘が始まった。

「サイコキネシス！」

「グヘエ！？」

ルウムの技に締めあげられたWゴーリキーが一弾ロトノの死に際の  
ような断末魔をあげる。

そこを1匹はジャードの10万ボルトで、もう1匹はゼウスのシャ  
ードボールでノックアウトされた。

「これで良いかな？　後は

「後の御前等だな」

「！？」

2匹の背後から不意打ちを喰らわそうとしていたポケモン達は電撃  
と硬い尻尾で吹き飛ばされた。

「封印！」

そして最後の1匹がルウムの技に拘束される。  
そのモンジャラは苦しみ、もがいたが

「電光石火」

ゼウスの体がモンジヤラを撃つた。  
モンジヤラは鮮血を吹き出して、力を失つたスバメのように地に墮ちた。

「ふう…………とりあえず助かつたかな？ それじゃ、もうこんな物騒な場所はおさらば」  
「わりい、姫君、ゼウス、先帰つてくれ」

危険の無いことを確かめているゼウスにジャードは言つた。

「え？」  
「シダケタウンに行つてくる。アーサー卿にはそう伝えといってくれ」  
ジャードはそう言つと、口に背を向け走りだした。

ゼウス

「？ ジャーデに何が？」

あれとあれ

ゼウス

「それより疲れましたよ。なんであれここまで行かなきゃなんないの

愚蠢言ひなつて（汗）

現在午後10:00・怪盗の予告していた時間まで残り一時間だ。屋敷で働いているポケモン達が怪盗の目標、ラピスラズリが置かれてある食堂に集まる。

「おや？ ジャードはどうした？」

ポケモン屋敷の主、アーサー卿が人数に違和感を抱く。

「今日シダケタウンに行つて戻つできません」

ゼウスが疑われないように言った。

煙突山まで行つた、なんて言つたら流石に怒られるだろ。

「ゼウス～また煙突山行こうね～

ルウムに墓穴を掘られた。

当然アーサー卿の耳にも届いている。

「…………ゼウス？」

「…………はい」

「…………まさか……煙突山まで行つた、なんてことは……」

「…………黙秘します」

アーサーは苦笑いだが目がシリアスだ。

今ここにいる全てのポケモンが怖いと思つている。

その後、5分程してゼウスは戻ってきた。

くどくどと説教をうけていたのだ。

アーサー卿は怒ると怖いが、決して暴力は振るわない（バトルとかの時は別）。

キンセツシティの住人に慕われている理由の一つでもある。

「まさか、ホントに煙突山まで行つたのか…………？」

フライゴンのカインがゼウスの側に歩み寄ってきた。  
屋敷の中で一番頭が良く、信頼も厚い。

「…………うん」

ゼウスは妙に俯いてボソッと返した。

レンは食堂の屋根裏に潜んでいた。

怪盗がここで下準備をすると踏んでいたのだ。  
理由は一つ。

数時間前に真新しい傷跡や細い透明の糸を見つけたのだ。  
屋敷のポケモン達に聞いても屋根裏に侵入する者などいなかつた。  
それが大きな理由だ。

レンは暗い部屋に積まれた段ボール箱の物影に潜み、気配を完全に  
消してみせた。

かつてミシロタウンに住んでいた時もよく使った方法だ。

あの時は貧困さに敗れ、悪政を行う領主の下でストーカー紛いの仕  
事をしていた。

「…………！」

カサコソ、という物の擦れるよつた音を聞きつけそつと首を出した。

「…………御前は？」

「臣のレティアンがじつとこちらを見つめていた。

「屋敷の影忍」

レンが希薄に返す。

レティアンは口の縁を軽く持ち上げると言つた。

「氣づいているのだね？」「

「ああ。怪盗Rだな」

「スピカ、といつ名は覚えていないんだな……ハツ！」

レティアンはスピカと名乗ると一気に肉薄した。

通常ではありえない早さ、マッハパンチだ。

それに対しレンは目を瞑つてじつと佇むのみ。

スピカの拳が彼の目の前に迫つてきた！

だが、スピカが勝ちを確信した矢先、レンの姿が搔き消えた！

「！？」

「はっけい」

レンの技がヒットし、スピカは吹つ飛ばされた。

彼は咄嗟に起き上ると状況整理のため思考回路を回す。

今のは……あれは、あれはテレポートだ！ いや、普通のリオルが覚えるわけがない……だがアイツは何事もなかつたかのようにテ

レポートを使つていたな……………！ まさか術式変換技？  
フォース・チェンジ

「スピカ。とつとと帰れば今回は許してやる。もうちょっとと頭を冷やせ。確かに怪盗はかつこいようだが、それは表の顔。本来はその辺のコソ泥と同類だ」

レンが淡々と告げる。

その言葉は一言一句がスピカにとつての挑戦状だった。

「う…………」

「そんな犯罪行為、俺は許せない。例え、どんな状況でも

スピカの怒りに火がついた。

大切なものを守る思い。その全てを“犯罪行為”といふ言葉で切り捨てられた。

彼の強い意志が、紅蓮の劫火のように燃え上がる！

「つるせえつ！…！」

レンが口をつぐんだ。

その赤い瞳が、銀色に輝くスピカを捕える。

次の瞬間、スピカの光と同じ色の竜巻が天井裏を満たす！

ドゴオオオオオオオンンン……

「な、なんだ！？」

アーサー卿が辺りを見渡す。

そこにいる全員がつるたえていたが、やがて水をうつたように静まりかえった。

「…………まさか…………天井裏？」

ゼウスが呟く。

「そのようだね。音の大きさ、音質からみてこのすぐ上の部屋からたつた音とみて間違いない」

カインが冷静に推考を述べる。

「天井裏って…………まさか、レンさん！？ レンさんが危ない！」

そう叫ぶとゼウスは走りだした。

## Legend: ハピスラズの思い（前書き）

うわあ…………疲れた…………

ゼウス

「やつと更新だよ。6日位間開いてるんじゃない？」

まあ僕の小説の中で一番読まれてないみたいだからね。感想一通も  
来ないし。

ゼウス

「いつか泣かせるよ？」

「はあ……はあ……！」

ゼウスと卿はレンが潜んでいた天井裏を目指して走り続ける。カイン曰く、レンが覚えている技では有り得ない音らしい。その言葉が正しければこの轟音は怪盗が起こしたものと考えられる。状況が正であれ悪であれレンに危険が迫っていることは必定だ。

「レンさん！」

ゼウスは天井裏につながる隠し扉を勢いよく開けた。そこには傷だらけになつて倒れているレンと、怪盗R、もといレティアンのスピカの姿があつた。

「怪盗……R……本名はスピカ……」

アーサー卿に介抱されながらレンが弱々しく告げる。

「並みの強さじゃ……ない……」

「フン」

レンの賞賛など気にしない様子で、スピカは肩から下げるショルダーバッグから何かを取り出すと地面に投げつけた。

「煙珠！」

「うわー？」

煙が部屋いっぱいにたちこめ、ゼウス達は目を開けられずに困る。

だがゼウスは戦闘の構えを解かない。

それどころか両掌を向かい合わせ、紫色の魂を作りだした。シャドーボールだ。

「ゼウス、相手の場所が分かるのか？」

アーサーが期待を含んだ声で問いかけた。

ゼウスはそれに対し、はつらつとした声質で答える。

「いいえ、分かりません。当たらずっぽうです」

アーサーの顔に縦線が無数に走る。

その答えは彼にしてみれば悪魔の現れに等しいだろう。

何故ならそこには怪盗がいなければシャドーボールが飛んでいく先は

「シャドーボール！」

「おいつ、やめ

」

アーサーの制止も届かず、ゼウスは紫魂シャドーボールを放つてしまつた。

当然その時にはスピカはそこにいなかつた。

放つた先はただの壁。

バキイツ！！ パラパラ……

その壁が、シャドーボールの威力を受けて凄まじい音をたてながら木端微塵に破れていつた。

「…………ゼウス……」

「卿！ 怪盗がいません！」

「当たり前だろー。何のための煙珠だと思つたんだー?」

この結果を予想していたアーサーの呆れを無視してゼウスは声をあげた。

その通り、スピカは煙珠の効果持続時間内にさつさと天井裏から出てしまつていた。

「ゼウス! 戻るぞ!」

アーサーが素早く踵を返す。

ラピスラズリのある石像は他の皆に守らせているが、アーサーが抱えているレンの様子から不吉な予感を感じる。

「はい!...」

ゼウスもアーサーのあとに続いた。

「う、嘘だろ?」

食堂に戻つたゼウスとアーサーは驚愕した。

石像を守つていたポケモン達が皆やられている。

その屍の群れの中に立つてゐる、否、宙に浮いてゐるポケモンが一匹。

スピカだ。

彼は石像の前に立ち、ゼウス達を認めるに邪悪な笑みを浮かべて一言。

「貰つていくぞ。ラピスラズリを

そつ言つて石像の、彼等からは見えないとこに手を伸ばす。

見えないが、そこに自分が守らなければならない物がある、というのは理解できる。

一寸の迷いもない。

ゼウスは再び前足の掌を向かい合わせ、ドッジボール程の紫色の魂を編み出した。

そして、目の前にしか目がいっていない怪盗に、寸分の狂いもなく放つ！

その間、僅か一秒。

「つづー！」

スピカはそれに気づいたが遅かった。

それを防ぐことは可能だったが、万全な受け止め方をすることは出来ない。

（それなら仕方ない…………！）

体を縮め、最低でも急所を隠すような体勢でゼウスの技を受け止める。

バチイツ！

スピカに激しい痛みが訪れた。

焦りの色が窺える目にはアーサーの真空波が捕えられた。

必至に身をよじらせ、紙一重でそれを防ぐと食堂の扉の方へ必至に飛ぶ。

「待てー！」

ゼウス達は必至で追いかけるが、食堂をでてすぐに見失ってしまう

た。

仕方ないので食堂に戻る。

「逃げられた、か……」

「いえ、またやつてくるかもしません。今日は徹夜ですね」

愚痴をこぼしつつ、スピカにやられたポケモン達の様子を見ていく。  
誰も致命傷を負つた様子はないのでほっとした。

「屋敷にこんな物があつたなんて……」

ゼウスは群青色の宝石、ラピスラズリを見つめながらため息を吐く。  
とても大きく、綺麗。

時価にして数10万ポケはあるだろう代物だ。

「ああ、私が…………絶対に手放したくない物だよ」

アーサーは宝石をとるといつとつと見つめる。

何か、大事な物。

絶対に譲れない物。

この宝石にはそんな思いでが沢山詰まっている。

だから、渡したくない。

物体を全て現金と同じような扱いをするような奴には、何があつても渡せない。

「絶対に、手放したくない物…………」

ゼウスがその言葉を反芻する。

具体的にどんなものは聞かされなかつたが、そのラピスラズリを、  
アーサーが大事にする気持ちを理解することができなくもない気が

した。

根拠は無い。

ただ、自分の中に漲る力がそれを物語つていてる。

その時

ビュン！

「危ない卿！ 電光石火！」

スピカの気配を察知したゼウスが電光石火で怪盗を討ちぬく。  
彼はスピカがこの附近でずっと自分達を見張り、あの宝石を盗みだす頃合いを見計らっていたのを知っていた。  
だが半歩ずれていた。

スピカは紙一重でかわすと、体を銀色に光らせた！

「な……な？」

ゼウスとアーサーはスピカの様子に違和感を感じる。  
突如、レンの声が響き渡った。

「危ない、卿！ ゼウス！！ それをまともに喰らつたらやられるぞ！ それは術式変換技だ！！」

「えつ！？」

「遅いっ！ 術式変換技、銀色の風×竜巻きー！」

その途端、銀色の竜巻きが食堂全域を襲つた。

テーブルや椅子が飛び交い、かなりの重量を誇る石像が、発泡スチロールの如く吹き飛ばされる。  
だがゼウスは素早かつた。

電光石火でスピカの真後ろに来ると、アイアンテールでその頭を殴

つ  
た。

「がつ！？」

銀色の風が消え、スピカとゼウスは石像が元あつた場所に落ちる。これで終わつたとゼウスが安心した瞬間、

「馬鹿！ それは強制脱出装置だ！」

绝望をも思わせるアーサーの声が響いた。

石像の下にハネが用意されていた」と「彼等が気づいた時は遅かっ  
た。

その時は既に宙を舞い「イー」「イ」とレティ「アンが、ギンセツシティを離れ、上空を東の方角へと飛んでいくのが、ポケモン達の目に映つていたという。

## Legend... 10 ハピスラズの思い（後書き）

はい～そういうことですので暫く我らが修羅、ゼウス君は登場致しません～

ゼウス

「はあ！？」

なんてのは[冗談] 次から怪盗とタッグくんで色々犯罪紛いのことを

ゼウス

「それもダメー！」

焦るなよ。半分[冗談だからわ

ゼウス

「半分！？ 残りの半分はホントに」と「？」

ノーロメント

「あいたた……」

ゼウスは暗い山の中腹あたりに落ちていた。  
どうやら繁みの中に落ちたらしく、首をひょい、と出すとガサ、乾  
いた音がなる。

「…………」

わざわざ声に出さなくとも良い台詞を声に出す。  
そうしないと言つても無い恐怖に襲われてしまつのだ。  
姉のマキからほぐれた時からのトラウマだった。

「…………」

答は周りの間に吸いこまれ、帰つてこない。

周りを沈黙が支配し、ゼウスを精神的に追い詰める。

その時、

「おい御前、とりあえず俺から降りろ」

彼を取り巻く気配を焼き消すかの如く、下から声があがつた。

「あ、貴方もここにいたんだ」

ゼウスは急に安心したような顔になると、その場からジャンプした。  
彼が元いた繁みの方を見ると、それはガサガサ、と音をたて、不意  
に一つの突起物を突き出した。

「いってえ……ま、命を落としてねえだけマシか」

スピカだ。

彼はゼウスに手を向けると言つた。

「おい、御前。ここが何処か分かるか?」

「知らないよ、そんなの」

ゼウスは拗ねたような表情を作つた。

こんな所に来てしまつた全責任をスピカに押しつけようといつ氣概がありありと見てとれる。

スピカはそんな彼の態度に苛立ちもせずに言つた。

「しょうがないな……御前、とりあえずここから出るわ。俺に協力しろ」

「嫌だ」

「嫌だつて御前……」

「貴方が怪盗なんて犯罪紛いのことをやつてなかつたらこんなことにはならなかつたんだ」

その発言に、スピカも少し苛立つた。

「フン、なら俺は一人でここから脱出する。御前は一人でやる。それで問題無いな?」

「…………」

ゼウスは首をブンブンと横に振つた。

この真っ暗な森の中に取り残されるのは御免だ。

それ位なら怪盗に力を貸した方が良い。

「せうだらう。じやあいへや。まづ名前を聞いておひう。何かと不便だからな」

「…………ゼウス」

スピカは全て計算通り、といった風に次の言葉をきりだした。

「ゼウス、俺達は今、敵に囲まれている」

「えつ…………」

「せう案するな。敵は雑魚一〇匹に、少し強いがやはり雑魚の頭が一匹だ…………言いたいことは分かるな？」

スピカはせう言ひと体を銀色に光らせた。

銀色の風に竜巻きの風速を付け加えた術式変換技、フォース・チエンジ シルバートルネイド銀色の竜巻きだ。

轟音をあげながら、銀色の竜巻きが辺りを揺らす！

「ぐはあー！」

「ぎやああー！」

そこの竜巻きからタネボーの集団が転がり出てきた。

その中から、タネボー達の親玉とみられる者、ダーテングがいた。

「切り札！」

ゼウスはダーテングにむかって必殺技を放つ。

ダーテングは周りに気をとられており、もろに彼の切り札を喰らつた。

「フツ、御前、なかなかやるじやないか」

「スピカもね」

互いに不敵な笑みを見せる。

そのまま、数で相手を圧すタネボー軍団と、  
的なり札を持ったゼウス＆スピカ。  
二人の正念場が訪れた。

Legend・12 深まる謎（前書き）

あ、今回サブタイと内容が一致しないかもしませんね

ゼウス

「は？」

まあゼウス＆スピカのタッグが爆進していくよ

ゼウス

「…………まあいいか。では、どうぞー。」

「はははははー！ 無駄無駄無駄あつー！」

スピカは悪鬼羅刹の声を出しながら連續パンチで襲い来るタネボーダー達を葬つていく。

「シャドーボールツ！」

ゼウスはタネボーダー達の親玉らしき存在、ダーテングと戦つている。二匹とも最初の一いつの術式変換技で敵にダメージを与えていたため、楽に戦えていた。

術式変換技は放った自分にも副作用が振りかかるが、その程度でこんな山賊達に負ける程ゼウスもスピカもヤワではない。

「く……確かに御前等は強い。……だが、まだまだあまい！」

相対するダーテングはその状況に余裕の笑みで向かっていた。そのまま片手の団扇でゼウスのシャドーボールを打ち返す。

「あまいのは貴方達だよ」

ゼウスはそう言つてシャドーボールを難なくかわす。

そのまま空中で近くにあつた木を力強く蹴る。

「電光石火！」

「グフウ！？」

ゼウスの刹那の動きをダーテングは避けることが出来ず、技を抵抗

することなく受けた。

そのまま体を折つて経へたりこむ。

そのガラ空きの背中を、彼は見逃さなかつた。

即座に尻尾を鈍い銀色に光らせん！

「アイアンテール！」

ゼウスのアイアンテールはダー・テングを<sup>マッハ</sup>音速の早さで動かした。ダー・テングは木々を幾つも薙ぎ倒して見えなくなつた。そしてこちらにも音速で動いているものが一匹。

「マッハパンチ！」

スピカだ。

彼はタネボー軍団の7匹を弾き飛ばし、田の前の1匹を肉薄していった。

そんな中、スピカに襲いかからうとするタネボーが

シユバツ！

ゼウスの電光石火にやられて動かなくなつた。スピカは彼に背を向けたまま礼を言つ。

「フツ、有難うよ、ゼウス」

それだけ言つと、田の前のタネボー達をしつかと見据えた。

「げ……」

タネボーはスピカから殺氣を感じて後ずさつたが遅かつたよつだ。

「終わりだ！ 連続パンチ！」

スピカがそう叫び、タネボー達に硬い拳が嵐のように襲いかかった。辺りに再び静寂が訪れる。

「そう言えば……貴方の術式変換技は見たことがない……」

危険が去り、安心したゼウスがその場に座り込んで聞いた。術式変換技は本来技の性能を書き換えるもの。技と技を組み合わせて強力な技を作るような技術ではないのだ。その疑問にスピカは難しそうに答えた。

「あー……こねな、フォース・フュージョン術式還元技フォース・チエンジつていうんだ。技と技の威力や性能をかけ合わせる、フォース・チエンジ術式変換技の発展型だ」

「そんなのがあつたんだ……」

ゼウスは目を見張る。

一匹の互いへの嫌悪感漂う雰囲気は既に消えていた。

「それより、だ。これから如何する？」

スピカは今彼等にとつて一番重要なことを聞いた。

「うん……ホントに如何しようつ……」

ゼウスは心細くなつて辺りを見渡す。

真つ暗だが隣にスピカがいてくれるのでそう怖くはない。たつた一匹側にいるかいなかでここまで違つのか、と思い知らされた。

「……まあまではこの山を降りることが必要不可欠だが、問題はその後だな」

スピカはそこまで言つと、不意に言葉をきつて先の戦闘におけるゼウスの実力を思い返した。

あの団体でかいダー・テングをアイアン・テール一発で彼方まで吹っ飛ばす威力。

更に遠距離からポケモン一匹を楽に倒せる電光石火。  
そしてあの切り札。事前に技を出していなかつたのに高い威力を誇つていた。

間違ひ無い。あれは術式変換技だ！

出来る。こいつらなら絶対に、アイツらを倒せる！

そう感じ、彼はゼウスに一つの案を投げかけた。

「なあゼウス」

「何？」

「この山を降りたらちょっと俺を手伝つて欲しいんだ」

「怪盗の仕事はやらない」

「そんなもんじゃないさ。俺がこの仕事から足を洗うためだ」

ゼウスはこの言葉に驚きを覚えた。

スピカは自ら望んで怪盗という仕事に就いたわけではないのだ。

ゼウス

「ちょっと待つて！ 僕は泥棒と手を組んだの！？」

はつはつは。だが彼は自ら望んで座盗となつたのではないのだ。

ゼウス

「微妙にラストをぼくつた！」

さてさて、続きですが彼等はある場所へ行きます。

ゼウス

「なんか稀に見る次話予告（汗）」

山を降りるシーンは完全に飛ばすつもりです！

ゼウス

「つもりだよね？ あくまでもつもりだよね？」

まあつもりだから書くかどうかは一切分かんない、と

ゼウス

「あれ？ 僕がミシロタウンに居ても大丈夫なの？」

？ なんで？

ゼウス

「一応デービスに命ねらわれてるんだよね？」

うん……まあ、そこは色々と……（汗）

ゼウス

「言葉を濁したよ（汗）」

「うわあ……やつと山を降りたよ……」

ゼウスとスピカが山を降りるとハートキタウンだった。

「スピカ」

「何だ」

「スピカが行きたいってのは何処?」

ゼウスがそこまで訊く。

するとスピカは彼にとつて酷な回答を出した。

「」の先  
「シロタウンだ」

「…………」

ゼウスの顔が一瞬で引き攣る。

最近ミシロタウンで領主が変わったといつ噂を聞かない。

あのデービスといつドサイドンがまだあの町に居座っていたらシ

ロタウンは彼にとつて危ない場所だ。

だが、デービスはいないという可能性もある。ゼウスはその可能性に賭けて見た

「あのや、ミシロタウンの領主って誰?」

「ああ、デービスとかいつドサイドンだ。ホウーンの中で最悪の領主だ」

「…………」

が、ダメだった。

「…………ゼウス？ どうした？」

「スピカ、僕は今から…………ええと……」

そのままゼウスは固まつた。

スピカは苛立ちも見せず、次の言葉を待つ。

「ええと…………ジャーダって名乗るから。間違えないでね！」

そう念を押す。

「？ 一体何事 」

彼はそこまで言つと、ゼウスの怯えた顔に気付いた。  
そのまま、ゼウスの意味すること全てを察した。

まさか、8年ほど前、ミシロタウンの領主に直訴を続  
けていたブースターが領主に殺された。その際にそのブースターの  
二匹の子供は行方不明になつたと噂を聞いたが……まさか……まさ  
か……！

スピカはある仮説をたてた。

その仮説の正しさを証明すべく、ゼウスにとある質問を投げかける。

「なあゼウ ジャーダ」

「何？」

「御前、グレイシアの姉はいるか？」

ゼウスは怪訝そうな顔をする。

答えない。

相手は怪盗の肩書を持つポケモン。答えるにはリスクが大きすぎる。だが、結局相手には自分の生い立ちがうすうす悟られている。相手を信頼に足る男であるとゼウスはとった。

「うん、いるよ。名前はマキ」

「……！」 フ、フレアさんの息子の一匹は御前だったのか！？

「知り合いで？」

「似て非になるものだ」

スピカはそう短くかえすとミシロタウン方面に向き直った。ゼウスは彼が最後に言つた言葉の意味が分からず首をかしげていた。スピカはボソツと呟いた。

「御前の親父は……素晴らしい奴だった。苦しむ者の為に動き、その命を惜しまない。彼を尊敬しているポケモンは今も沢山存在している。俺もその一人だ」

彼の顔は後向きで分からない。

だが、少し苦笑を浮かべているのが分かる。

「あの方は良いポケモンだつた。例え相手がミシロ領主の独裁者であつても勇敢に立ち向かつていつた。俺は彼の弟子として、フレアさんを信じた。それが……今の有様だ。情けねえな」

そつとつて大きく深く溜息を吐く。

「ジャード、御前はまだテービスに狙われていると思うつか？」

「多分……アイツの手下のグライオンは父さん達だけじゃなく僕達まで殺そうとしてたから……今も機会さえあれば殺してやろうと思つてるんじゃないかな」

ゼウスは言いながら変な感覚に気づいていた。

父さんのこと喋っているはずなのに悲しくなっていない……？

だがそのことを深く考えている余裕は無かつた。

彼は歩き出したスピカについていった。

「久しぶりにここに戻つたが……変わらないな」

スピカが哀愁の漂う声をあげる。  
ゼウスは懐かしい何かを感じる。

だが、周囲からの視線がやけに気になった。

スピカはさつきから“ジャード”としか呼んでいない。

だからばれでいる筈が無いのだが……

市場は活気に満ちている。

だが、行きかうポケモン達の顔に光が感じられない。  
貨、日々を生きていいくのに精いっぱいのようだ。

「ここだな。ジャード、ここで俺が命图を出したら思いつきり暴れてくれるか？」

ミシロタウン、領主屋敷前。  
スピカがゼウスに指示をだす。

「それは良いけどさ、そろそろ言つても良いんじゃない？」

「なんだ？」

「スピカはここまで来て何をしたいのさ？」

スピカはその間に声を詰まらせる様子も見せるでない、平静とした態度をとっている。

対するゼウスは彼が全てを答えるまでは梃子でも動かない、といった構えだ。

無理に張り合ひ必要はない、と思つたのかスピカは抵抗も無く答えた。

「俺はかつてここに住んでいた。そこで安らかな暮らしを送つていた。だがそれは永くは続かなかつた。13年ほど前。領主が交代し、新しい領主はかつての歴史でも見られないような暴君、デービスだつた。俺は物心づいたレディバだつた頃から隠密行動の類が得意だつた。それをアイツに利用された。俺の家族は全員人質にとられ、俺は仕方なく怪盗となり果て、奴の懐の為にあらゆる高級品を盗んだ。そうしないと、家族は殺されてしまうからだ。俺は怪盗となつて10年。ひたすら足を洗う機会、つまり俺の家族を助け出す機会をうかがつていたよ。そしたらいきなりとてつもない実力を持つイーブイ、つまり御前の噂を聞きつけた。だからあの日、アーサー卿の屋敷へ忍び込んだ。そして御前以外全員を氣絶させる為に戦つたのだ。御前の力を借りるために」

ゼウスは絶句した。

あの怪盗の、意外な一面。  
この時彼は知つた。

この世で、辛い思いをしている者は自分だけではない、と。  
ゼウスも協力する気になつた。

そして、頷く。

スピカは笑つてかえす。

「よく言つてくれた。じゃあ、この不思議珠が光つたら屋敷の前で思いつきり暴れてくれ

そう言い残し、屋敷の横に彼は消えた。

ゼウスは目を閉じて待つ。

そして思い出す。

彼の、怒りに震える蒼い目を。

こんな理不尽な領主、デービスに対する怒りを。

自分は8年前、デービスに父と母を殺された。

スピカもまた然り。

その怒りを繰りながら、時が来るのを待つ。

「…………！」

やがて、時はきた。

スピカの珠が光りだした。

ゼウスは掌を合わせ、紫色の球体を作り出す。

## Legend・13 故郷ミシロタウンにて（後書き）

と、いうわけで、次回、『テービスとゼウスが無駄なバトルを繰り広げます。

ゼウス

「む、無駄とはなんだよ（怒）」

ジャードとか出なくなっちゃったけど、次か次の次位に出すんで。

## Legend: 14 ヴィクトーリア（前書き）

じゃ、今回サービスと戦つて貰つからwww

ゼウス

「？ 大丈夫なの？」

暗殺を部下に行わせたんじゃんwwwwww平氣平氣

「……」

スピカの不思議珠が輝きだした。行動開始の合図だ。  
ゼウスは両掌を向かい合わせるとその間に紫色の魂を作り出す。  
刹那、その魂をデービスの大豪邸の壁に叩き込む！  
ドガーン！！

そして、両脇から屋敷の従者達が走ってきた。

「何者だ！」

従者達は槍を突き付けると声を揃える。  
ゼウスは不敵な笑みを浮かべ、声色を低くして答えた。

「僕はジャード。正義を掲げる者だ」

そう言つた瞬間、ゼウスの体は一匹のミズゴロウの後にあった。  
ミズゴロウはゆっくりと地面に倒れる。  
従者達がその光景に見とれている隙にゼウスはアイアンテールで一  
回転し、周囲のポケモン達を薙ぎ倒した！  
たちまちポケモン達がゼウスに襲いかかる。彼は暫くは労せずに彼  
等を叩き潰していく。  
が、やがてガタがきた。

「ぐ……」

ポチエナの噛みつくがゼウスのわき腹をかすつた。

鋭い痛みが彼を襲つ。

そして、それからゼウスの動きも変わつた。  
痛みを堪えるように隙を見せながら戦つてゐる。  
その隙をポケモン達が逃すはずが無かつた。

「オクタン砲！」

「草結び！」

「ぐつ！」

そして彼は危機に晒される。

更に周囲をポケモン達に囲まれて絶体絶命の時、何かの声を聞いた。

『ゼウス……俺はいつでも御前を助けてやる。だから安心しろ。』

刹那、体中が熱気に包まれる。

周りのポケモンも彼を見て後ずさつてゐる。

どうやら表面上でも何か変化が起こつてゐるようだ。

「な、なんだあのイーブイ……いきなり火の粉を出しあがつた……

「厄介そうな相手だなあ……」

周りのポケモンは後ずさつてかかつてこようとしてしない。  
今、ゼウスは体から紅蓮の炎をちらつかせているのだ。  
従者達は訳が分からぬ。

だが、ゼウスは何が起こつたかがすぐに判明した。

あの声は……間違ひ無い、父さんの声だ！ 父さんが、

僕に力を与えてくれているんだ！

そう思つて力を籠める。

体がどんどん熱くなる。

そして彼は燃え盛る炎のように、赤く輝いていく！

熱い、熱い、熱い！ 耐えきれない！

そこで彼は力を放出した。

極太い炎の柱が、彼を包囲していたポケモンを吹き飛ばす。

「やつた！」

そう思つて安堵のため息を吐く。

それもつかの間、ゼウスに第一の刺客が現れる。

「御前達、こんなちんけなイーブイに苦戦するのか？」

それはゼウスにとつて両親を殺した怨敵であり、ミシロタウン住人の苦悩の種、暗君デービスだった。

「んん？」

デービスは訝しげにゼウスの顔を覗きこんだ。  
そして問い合わせる。

「御前、8年位前に死んだフレアの息子に似てんない？」

「！」

ゼウスを一瞬戦慄が走る。

だがあくまで彼は知らないフリをつっぱねるつもりでいた。

「フレア？ それは誰だよ？」

すると、デービスは嘘八百を並べまくった。

「あーポケモン違いか。フレアは良い奴だつたぜ。」のミシロタウンで苦しんでる者を助け、自ら声に出して憐れみを満たす、そんな奴だ。俺はアイツをなんとかして助けたかったんだが8年位前にどつかの誰かに殺されちまつて

「嘘だ！ 父さんは御前に殺されたんだ！ 僕は見たんだ！」

そう叫び終わって、彼は言つてはいけないことを言つてしまつたのに気がついた。

「父さん？ ほう、そうか……御前はやはりフレアの息子だったか。ジャードなんて大層な偽名を名乗りやがつて」

デービスは邪悪な笑みを浮かべると周りのポケモンに離れるように指示をだした。

「さがれ。コイツの死刑は俺が行つ

そう残酷なことを言つて拳を構えた。  
ゼウスは、今までにない恐怖に襲われた。

「あ…………あ…………」

言い様のない威圧感と半ばあきらめの感情を感じる。  
だが、行方不明の姉、マキの言葉が、不意に脳内をよぎる。

『父さんは貴方を庇つて死んだのよー。なりこじでゼウスが死んじやつたら何の為に父さんは死んだのよー』

「…」

別に思い出したわけではない。

ただ記憶の片隅で、無意識に甦つただけだ。

それが何故、こんなにも自分を奮い立たせるのだろう。

ゼウスはテービスが振りあげた拳を睨みつける。

そして、必至に打開策を探す。

周りはポケモン達に遠まわしに囮まれて、目の前には自分を殺そつと殺氣だつドサイドン。

その中から小さな打開策を、必至に探ししまわる。

だが、遅かった。

テービスが、その硬い拳を今までに、振り下ろす……。

その時だった。

ゼウスの目の前に何かが飛び込んできたのは

ガツ――

「！？ な、なんだ御前！？」

「まさか……ジャード！」

「へッ、御前、このドサイドンの話を聞く限り、俺の名を名乗つてたそうじやねえか？」

リフレクターを開け、テービスの拳を防ぐそのピカチュウは紛れもない幼馴染、ジャードだった。

「有難う！ でも、なんで？ なんでここに？」

「ゼウス、それは後だ。今はこのクソ野郎をぶつ飛ばすのが先だ」

「あ、うん」

ゼウスはそう答えると、持てるだけの全力を出し切る。

電光石火が、テービスの足元を惑わせた！

「んなつ！？」

「隙ありだ！ 気合いパンチ！」

「デービスは5？後に吹っ飛ばされ、気を失う。ゼウスはその一瞬を見限つて逃げ出した。ジャードも後に続く。

「でも……どうしたもんかな……」の後どうやって逃げれば……」「大丈夫だよ。スピカがきてくれるから、捕まつて上空から脱出出来るんじゃないかな」

「スピカ？」

「怪盗Rのことだよ。正体はこのミシロタウンの住人のレティアンだつたんだ」

その時、羽音が鳴り響いた。

ゼウスはすぐに気付いた。スピカが来たのだと。そしてジャードはコイツがスピカか、と呟く。

「俺を呼んだか？…………ん、そのピカチュウは」

「後で説明するよ。それより家族は無事だつたの？」

「ああ、御前が程良く暴走してくれたお陰で気づかれずにすんだ」「それなら良かつた。奴に見つからないうちにここから出るぞ」

「うん」

「ああ、良く分からんが頼む」

ゼウスとジャードはスピカの6本の腕のどれかに捕まつ、ミシロタウンの上空を越えていった。

ゼウス

「ビニが平氣なのー? 僕もついよつとアーヴィングに殺されたのー? だつたよねー?」

まあ結果として助かったから良いくんじゃない?

ゼウス

「いやいやー もしどジャードが来てなかつたら  
既に起きたー」とヒューマンは禁句だよ?

ゼウス

「訳の分かんない」と言つてんじやないよー。」

## Legend: 15 アーサー卿の推薦（前書き）

おー、久しぶりの更新♪

ゼウス

「ちょっとー? 12月中旬位から全く更新していないじゃないか!  
?」

色々と企画とかあって忙しくてねえwww

ジャーードのリクエストでスピカはキンセシシティのど真ん中に降り立つた。

「ゼウス、大丈夫だつたか？」

「もちろん。そう言つジャーードはなんでここにいるの？」

ジャーードとゼウスは互いに安否を確認する。

「ああ、シダケタウンから帰つてきたら卿が御前タイム・ワープが怪盗Rと何処かに吹つ飛ばされちまつたつて仰つてたからな。時空超越タイム・ワープを使って御前等が飛んでいった場所を見極めて……と色々やつて御前を見つけてな訳だ」

「？ お、御前、“タイム・ワープ时空超越者”か！？」

スピカがジャーードにつけられた肩書きを訊き、驚愕する。

「ああ、それがどうした？」

ジャーードがそう返すとスピカは黙り込んだ。

なんともないことか、と思ったのか、何かを考え込んでいるのか分かりにくい。

（まさか、あの神の術式変換技を持つ者がここにいたか……！）

「……スピカ？ どうしたのさ？」

ゼウスは下からスピカの顔を覗き込む。彼は真剣そのものの顔つきだった。

（…………さつきの言葉から察する限りこのピカチュウ  
ジャードは何も知らないようだな……まあアルグレウス研究所は金  
を払えば良いとして…………問題はデービスの野郎だな）

スピカは心の中で葛藤を続けていた。

何か、押してはならないスイッチを押したように、彼の心は乱れていた。

（とりあえず、デービスが知れば奴はここを責めるに違いないな……  
だが今優先すべきは……）

とりあえず、ヒスピカは頭の中で必死に考えていたことは全く関係ないことを言い出した。

「この街の中で俺が住めるような場所、あるか？」

翌日、アーサーに事情を全て話したスピカは彼の許しを得てキンセシティの片隅にあるマンションに住みついた。

「よつと……おい、スピカ、御前の荷物は本当にこれだけか？」

ジャードが呆気にとられた表情を作る。

そもそもその筈、スピカの荷物はゼウス位の大きさの風呂敷包み一つしか無かつたのだ。

ゼウスもスピカを可愛そうな目で見つめる。

「お、おい御前、何だその眼は？ 違うぞ！ 所持物が多かつたら  
なにかと行動しにくいからさつさと売り払って金にしてたから荷物  
がそれだけになつてんだ！ 決してわびしい生活を送つていたわけ  
ではないつ！」

スピカは慌てながら弁明。

そのうろたえる様子は何かと面白かつたり。

「あー分かつた分かつた

そんなどこに、アーサー卿が来た。

「ゼウス、ちょっと良いかい？」

「あん？ 誰だ つて卿？ 何事だ？」

ジャードは先程のアーサーに対する態度は気にしない。  
アーサー自身も瘤に障ることでは無かつたようだ。

「バトルリーグって知つているよね？」

バトルリーグ。1年に一度、ミナモシティで開かれる、ポケモンバトル大会。

個人が参加するのではなく、一団<sup>1</sup>としに最強の選手を代表に選出して戦わせる、ホウエン地方が統合して行う唯一のイベント。  
去年はキンセツシティ代表はカインが出ている。惜しくも準決勝で敗れ3位という結果だった。

「そついえば今年もバトルリーグの時期なんでしたね  
「またカインが参加するのか？」

「それがさ…………」

アーサー卿は微かに苦笑いを浮かべながら言った。

「今年のバトルリーグ、団体戦らしいんだよ」

「「団体戦？」」

ジャードとゼウス、二人の声が重なる。

「そうだ。各区から3匹代表選手を選出することになった。一匹はカインに決まった。もう一匹も「タタタタはあつたがゼウスが出ることになった。そしてもう一匹は…………」

アーサーはそこまで言いつと口を止め、チラリとスピカに視線をやつた。

「…………俺か？」

スピカは、期待を僅かに含んだ口調で尋ねる。

「ああ、君の実力を調べる手前、参加して欲しい。出来るか？」

彼の、不敵な笑みにもスピカは恐れなかつた。

「ははっ、上等だ。思いつきり暴れてやるよ」

「有難う。それで今回のルールなんだけど…………」

アーサーは一人に説明を始めた。

## ホウエン地方リーグ ポケモンバトル大会。

- 1、団体戦で3匹の参加とする。
- 2、登録者以外の参加は認めない。

3、登録者の数は補欠1名を含み4匹。

4、フォース・チェンジ術式変換技は使用可能

「術式変換技…………！」

ゼウスはこの単語に息を飲む。  
彼は身の内にそれを秘めた者。  
それはスピカでもまた然りだ。

「御前、コレを持つ奴が大会に出ると思つていいのか？」

スピカが、アーサーの考えを見抜いた。  
だが見抜かれた本人はさほど痛い表情も見せない。

「ああ、去年まで、術式変換技は大会では使用禁止だつた。それが  
解禁された以上、他の区では必ず一体はその技を持つ者が参加する。  
私はそう思うよ」  
「彼等の技に、対抗する為ですね」  
「恐らくこの大会、鍵は術式変換技を持つ君達が握つてゐる。健闘  
を祈るよ」

アーサーはそう言って帰つていった。

## Legend: 15 アーサー卿の推薦（後書き）

はい、つづ一訳で次はミナモシティだね。

ゼウス

「ホントに行くの？」

ホントに。

ゼウス

「団体戦ってどんな感じ？」

だから一匹ずつ戦つていくんだよ。

ゼウス

「あのさ、先月更新してないのは気のせい？」

「気のせいじゃない。とある事情で更新をお休みしてたんだ。読者様、御免なさい！」

と、それから物語が大きく変わります。

ゼウス

「へえ、どんな風に？」

まあ大きくは新キャラが4匹登場。数えようつによつては5匹。

ゼウス

「何故前者と後者で変わるの！？」

ゼウスはバトルリーグへ向けて鍛錬に取り組んでいるところだった。

「シャルフェアナ、手合せを頼める?」

彼はメイド服姿のミニロップに頼んだ。

実はシャルフェアナはパフィーの姉である。

「私は今忙しいのですが。少々後にしてもよろしいでしょうか」

彼女は淡々と答える。

そして、

「どうしてもと申すならライテとトアレの2匹に頼むといいです」

そう言って、プラスルとマイナンの2匹を呼び出した。

彼女らもメイド服を来ている。

「はい

「何ですか、チーフ

彼女らがのほほんとした様子で来る。

シャルフェアナは一匹に指示を出した。

「ゼウスの鍛錬に協力して下さい」

「え……それはちょっと……」

「私達も怪我はしたくないので」

セウスがトライテとトアレは明後日の方向へ逃げていってしまった。  
今やゼウスは恐れられる程の実力を身につけていた。  
ゼウスが、困つていると声が響いた。

「私が相手してあげようか」

「え……」

高く瑞々しい少女の声。

ゼウスがポカーンとしているとその声の主らしきロコンが降り立つた。

「白炎、コイツで合ひてんだよね、ミナモシティバトルリーグのキンセツ代表の一匹は」

「うむ。間違ひ無い。さつたと実力を調べ上げてトウカシティに戻るぞ、レナテー」

と、何処からか別の声も聞こえてきた。低い遠雷のような男性の声。だが周りにその声を出したらしいポケモンはない。

「アンタ、バトルして欲しこんでしょう。早くやるわよ」

「え……でも……」

「五月蠅い。わざわざ構えなさい」

レナテーと呼ばれたロコンの少女は強気な態度で迫る。

「待て」

その時、白炎といつらじき声が止めた。

「何」

「」やつ、『ブイズの灯』<sup>ともしび</sup>を持つているだ

「えー？」

その時、ゼウスは白炎の声がレナテーの耳に巻かれた一條のリボンから発せられていると気づいた。

勿論レナテーはそんなことは気にしない。

暫くゼウスを見ながら白炎と何か言いあつていたが、

「御免。帰るね」

そう言つと背中から一吹きの炎を出した。

それは彼女の背中で紅蓮の双翼の形をとつていぐ。

フォース・チエンジ  
術式変換技？

彼はそう感じた。

「ちよ、ちよっと、いきなり何？」

その時、ゼウスは今日の前にロロンが異端者であるとみつけた  
気付いた。

「貴方が暇そだからバトルの相手でもしてあげようと思つただけ  
よ。状況的に無理なんだけね」

そう言つてレナテーは地面を勢いよく蹴つて宙を舞つ。  
紅蓮の閃光が夜空に走つた。

「.....」

ゼウスは“今のは何だつたんだ……”という表情でレナテーが飛んでいつた方向を見る。

突如、後から声をかけられた。

「ゼウス、今のはなんですか」

「ん……」

振り返るとそこにはシャルフェアナがいた。

「もう一度聞くであります。今のはなんでしょうか」

「や、やだなあ、なんで僕が何かしたような顔で見てくるのさ。今はただの侵入者だよ」

「それなら問題無いのですが…………」

「が？」

「もし何かあれば即座に卿に連絡が行くでしょうね。御身が不審なポケモンを屋敷に招き入れていた、と。フフ」

「え！？ ちょ、ちょっと！？」

ゼウスはとんでも無い、という風に悲鳴をあげたが、シャルフェアナは去つていった。

今のは彼女なりのお茶目なのだと彼は知っていたがどうにもそれに慣れることができないゼウスであった。

一日後、ゼウス達はミナモシティにいた。

「…………元怪盗の俺がここにいて大丈夫か？」  
「卿が全国に手を回して指名手配を取り消してもうつたらしこよ。  
安心したらしい」

バトルリーグ出場者のスピカとカインが会話をかわす。  
ゼウスはミナモデパートにいた。

「ジャード、確かこの前ペンが無いとか言つて騒いでたよね」  
「あん？ ああ、書きやすいから重宝してたんだよなアレ」  
「ここに同じ種類のがあるけど」  
「ウオ！ てか俺が欲しかった種類のが沢山あるぞー。ここすぐえ  
！」

ジャードは珍しくはしゃいでいる。

「ゼウス、ジャード。卿よりお呼びがかかつてています」

いつのまにかシャルフェアナが来ていた。

「はーい、分かつた」

「なんの用事だ」

「ゼウスは大会時の出場順、ジャードは来客人がおいでです」

ゼウスは選手が止まるホテルへ向かう。

ジャードは来客人が気になるのかシャルフェアナに聞いていた。

「来客か」

「はい。ロコンが一匹来ているのです。知り合いでですか」

「いや、知り合いでロコンはいなかつたけどな……」

ジャードはその来客のところへ向かう。

耳に一條のリボンを捲いたロコンはジャードが来るや否やこきなり切り出した。

「あのイーブイは来ているか」

「な……」

高く透き通った少女の声。  
ジャードはその声に一瞬聞きいつてしまつたが、すぐに思考を取り戻した。

「な、なんだ御前。何処の何サマかも言わないで用事を切り上げて  
わつわと戻るつてクチか」

「良いから早く答えて。あのイーブイはいる?」

「あのイーブイ……つて」

ジャードはわざと言葉を濁した。

このロコンの少女が意味するイーブイが誰のことかなぞ分かりきつ

ていたが、分からぬフリをする。

ロコンの少女はそんなことはお見通しだ。

「決まつているでしょう。切り札の術式変換技を持っているアイツ  
よ。ゼウスつて言つたかしら?」

「…………」

答えるのに躊躇う。

わざわざとぼけていたんだからこりであつれつ言つのも気が引ける。  
このロコンが何者かも分からぬし、ゼウスはいまテービスに命を  
狙われている。

簡単には言えない。

「答えない、つてことはイエス、つて言つてゐつて」とね?」

だから、敢えて一つ訊ねる。

「その前に、名前を聞かせて貰おうか。正体不明の者に情報をばらす趣味は俺には無い」

相手の名前を。

ここに一瞬でも躊躇つたり、嘘臭い名前だった場合は言わない、といふことで済ます。

「私はレナティー。ポケモンを超えたポケモン」

だが、それはレナティーには通用しなかった。  
彼女は一瞬の間を置こうともせず、その質問 자체を見抜いていたかのようにあっさりと詰つ。  
最後の一言に謎が詰まつすぎたことであつて、ジャードは判断できなくなつた。

「……答えないなら答えないで良いんだけどね、ちょっと忠告させて貰うわよ」

レナティーは待ちくたびれたように首を振つた。

「ゼウスは『ブイズの灯』を持つてるわよ

「……何？」

ジャードは未だかつて聞いたことがない単語に狼狽していた。

「ブイズの灯はイーブイが持つと最強の力になる聖なる宝。貴方、ゼウスが炎を出したのを見たりしてない？」

「見ていたが聞いた。紅蓮の炎を出したイーブイがミシロタウン

役所前で騒いでいる、と。即座にアイツと分かつたがな

でも、ジャードはわけが分からなかつた。イーブイという種族は普通炎なんか出さない筈なのに。

レナターはそのジャードの疑問を打ち消すべく、答える。

「それこそブイズの灯の力。イーブイがその灯を持つと、その進化系のポケモン全ての力をその身に収めることが出来るのよ」

「…………つまりは……」

「あの子はイーブイでありながらブースターの力である炎を出せる。シャワーズの力である水も。他にも、サンダース、エーフィ、ブラッキー、リーフィア、グレイシア。それらのポケモン全てが持つ力を一概に出せるのよ」

ジャードが驚愕の表情を見せる。

「ゼウスはそれを知つて、その宝物を持つていいのか！？」

「本人はそんなこと知らない。気づいてもいない。ブイズの灯は体の中に憑依する」

そこでレナターは言葉を切つた。  
そして、正体不明の声が

「だが、灯の力は徐々に顕現しつつある。ゼウスとやらが氣づくのも時間の問題であろう」

今までのことに散々腰を抜かされてきたジャードは何処から発せられているか分からぬ声には驚かなかつた。

それは白炎の声であつたが勿論彼はそんなことを知る由も無い。

「そやつが『ブイズの灯』に気づく時。それは自らの願いを叶い給える時だ」

白炎の、意味深は言葉が響いた。

## Legend: 16 大会直前で（後書き）

ゼウス

「物語が大きく変わるつて言いやがつたわりに進んでないと思う」

ジャード

「全くだ。バトルリーグにも突入しないぞ」

次話……くらいからバトルリーグにはいけると思う。

ゼウス

「作者さん、最新話を始めるにあたって読者様に何か一言」

はい、皆様。諸事情により更新を1ヶ月程放置しておりました。誠にすいません（汗）

それから今回あの御方が登場です。

「はあ、はあ」

ジャードはキンセツシティからミシロタウンまでの道のり、ゼウスが逃亡する際に通っていたルートを走っていた。

ブイズの灯という、わけのわからない物体が、こいつどんな時にゼウスに憑依したのか調べるために。

「アイツがどこを通りてきたのかは別次元再生で調べてから問題ないが……」

ジャードは<sup>タイム・リプロダクト</sup>时空超越者。

ゼウスがどの道を通りてきたのかなどはすぐ<sup>タイム・リプロダクト</sup>に調べることが出来る。だが、

「アイツが落ちたこの崖は……」

ジャードはそう言つて、今日何度目かの別次元再生<sup>タイム・リプロダクト</sup>の光をだす。だが、光はすぐに消えた。いや、ジャードが消したのだ。

「はずれか……」

ひょっとしたら結構昔に憑依したのかもしれないな、といつ推測を持ち、ジャードは崖を登つていった。

総勢48匹のポケモン達。つまり、バトルリーグに出場する全ポケモンが並び、開会式が行われていた。

『宣誓！ 我々、選手一同は  
ことを、誓います！』

会場いっぱいに選手宣誓や、諸注意の声が響く。  
そして、対戦のトーナメント表が表示された。

1回戦 第1試合 キンセツ▽ミシロ 第2試合 シダケ▽スム  
ロ 第……

「ゼウス……！」

スピカが戦慄を見せる。

それに対してゼウスはあくまで怯えた態度を見せせず、

「1回戦でいきなり『デービスと戦うんだ。面白いじゃない』

と楽観的な声を出す。

勿論心中では楽観していなかつた。

ドサイドン、という種族は決して甘く見れる者ではない。

寧ろ防御力が高い岩タイプを備え、格闘タイプの技を覚えていても全くおかしくない体格を持つ。

ノーマルタイプのイーブイ、ゼウスには天敵中の天敵だった。

それにデービスだけではない。

おそらく彼はこのバトルリーグで優勝できるようなメンバーを集めている。

なんにせよ、一筋縄ではないかない。

「あちやー、やられたか。ミシロタウンが大会の管理委員会を務めてこるつていうの忘れてたな」

会場の観客席にいたアーサーは額に手を当て、一本とられたような顔をしている。

「卿、如何しました？」

隣に座つていたレンが訝しげに尋ねる。

アーサーはそれに

「ああ、いや、なんでもないよ」

と答える。

全国にスピカの指名手配を取り消すよつオファーを出していて、それが、スピカがキンセツシティに在住している、と教えていたのと何ら変わらないことを忘れていた。

まあ、今更去つたことを悔やんでも仕方ないか、とアーサーは立ち直つた。

「Iリも違つのか……」

ジャーードは別次元再生を解いた。

淡い光がフツと霞のように消える。

ミシロタウンのとある廃屋の敷地内に彼はいた。

かつて、フレアと名乗るブースターが妻と、2匹の子供たちと安静

に暮らしていた家があつたところだ。

ジャードはここでブレイズの灯がゼウスに乗り移ったと考えたが、別次元再生が映し出す映像にはそんなものはどこにも映つていなかつた。

「だとすれば、ミシロタウンかキンセツシティの何処かだが……」

ジャードは考へかけて首を振つた。

「無理だなー両方合わせたら5000haくらいになるしな

5000haとこうと100ha四方の土地が5000ha集まつている  
といふことだ。

その全てを調べるとしたら1年以上はかかるだらう。  
そんなに時間はかけられない。

これは自分の興味本位、つまり自己満足の為にやつていることだ。  
知らない間にわけのわからん物体が友達の体内に入つているという  
のは何とも気持ち悪いことだが、知らなかつたからといって別に死  
ぬわけでもないのだ。

「……帰るか

そう言ってジャードは踵を返した。

バトルリーグ会場では、試合の出場選手が控え室に向かっていた。

『えー第1試合、キンセツシティ vs ミシロタウンの試合の出場者  
を発表いたします』

ゼウスのいる控室に、司会進行役のスマクローの声が響いた。

『キンセツシティ代表。フライゴンのカイン選手、レティアンのスビカ選手、イーブイのゼウス選手』

「なんですかー!?

ミシロタウンの控室。1匹のグレイシアが金切り声をあげた。  
そして、傍らにいたドサイドン もちろんデービスである、を睨みつける。

「デービス、何を考えているの

「何がだ」

あくまでじりを切るつもりのデービスを彼女は問いただす。

「ここで私とゼウスを会わせるのはアンタにとって都合が悪いんじやないかしら?」

「さあ、決して都合が悪いとは言えないな。それにイーブイのゼウスだからといって御前の弟とは限らないだろ?」

彼女の鋭い視線が、デービスを刺す。

その緊迫した空気の中、司会が声を紡ぐ。

『ミシロタウン代表。ウインディのベリアグナ選手、ドサイドンのデービス選手、グレイシアのマキ選手』

「「えー?」」

キンセツシティの控室内に、ゼウスとスピカ、2匹分の絶叫が響いた。

「へえ、マキさんが出るのか、楽しみだな

カインが心底楽しそうに叫び。

「カインさん、そのマキってポケモンを知ってるの?」

ゼウスが尋ねるとカインは

「同じ名前の別ポケモンとかだったら話は別だがな、マキさんは<sup>フ</sup>  
オース・チエンジ式変換技開発の第一人者なんだよ」

と答えた。

「……?」

スピカは何故それで喜ぶのか、全く分からなかつた。

ゼウスや自分のように術式変換技を持っていると言つなら分かる。だが、カインはそういうものは全く持つていない。覚えている技の全てが自然に覚えるものだ。

それでいて、術式変換技を開発したポケモンを敬う意味が分からない。

「ねえカインさん、そのマキっていつポケモンの生い立ちとか分かる?」「

ゼウスは予想を確信にするためカインに尋ねた。

カインは答える。

「そうだな、ミシシロタウンに弟と両親の4匹で住んでいた、といふだけ知っているよ。とりあえず有名なポケモンだ」

「その親とか弟の名前とか知らない？」

「僕は別に芸能人のファンとかいうわけじゃないからね。知らないんだ つてゼウス、何故いきなりそんなことを聞いたんだ？」

それまでべラべらと喋っていたカインは急に訝しげな顔色を見せた。

「……僕は前に両親を殺されている……そのマキつていうポケモンも、両親を殺されている。そしてマキの弟は生きていれば僕と同じ年。違う？」

カインは首を傾げて言った。

「知らないけど……試合開始まで小1時間あるな。携帯があるから調べてみるか」

カインはそいつて持参のショルダーバッグのなかから携帯電話を取り出した。

そして15分後、携帯を閉じて言った。

「マキさんは確かに両親を殺されている。それから弟は生きていれば今13歳。ゼウス、君は……」

「僕も13歳だよ。それに僕にはマキつていう名前のグレイシアの姉さんがいるんだ」

カインが笑顔のまま固まつた。

「信じてくれる? 僕は8年前、ミシロタウンに住んでいた。色々あつて、僕の父さんは領主から田の敵にされていた。そして、殺された。僕と姉さんは命からがら、ミシロタウンから逃げ出したんだよ」

カインは返す言葉が無かった。

一言、

「別に、ミシロタウンの代表として出るマキさんが君の姉とは限らない。でも……もし彼女の親を殺し、彼女や君を良い様に操ろうと言つなら僕は絶対に『サービスとかいう暗君を止めてやる。だから、ゼウス、安心しろ』

とだけ言つことが出来た。

ゼウス

「本当に姉さんかな？」

わあ、どうだいひね～

ミナモシティバトルリーグは団体戦である。3対3で勝負が行われる。

キンセツシティとミシロタウンの試合。キンセツシティ側からはフライゴンのカインが一番手で出た。

対するミシロタウン側の一一番手はウインディのヘリアグナ。両者は向かい合い、試合開始の合図を待つ。

観客すらも喋ることを拒み、本当の意味での沈黙が辺りに降りる。ただ司会1匹が、旗を振りかざす。

『それでは、ポケモンバトル

』

この瞬間、カインも、ヘリアグナも、観客、更にキンセツ、ミシロの残りの代表も固唾を飲む。

やがて旗はバツという音と共に振り下ろされた。

『スター——ト!——!』

瞬間、カインは地面を蹴って大空を舞う。ヘリアグナが飛びかかった瞬間、彼は両翼を力強く羽ばたかせて、

『砂嵐!』

粒子の巻きを起こした。

「つづー?」

ヘリアグナが怯む。その瞬間、カインは燕返しでヘリアグナに斬りかかっていった。

燕返しは素早い動きで相手を翻弄する技。それは強風起る砂嵐の中でも例外ではない。

「斬！」  
「ザン」

計算違わず、ヘリアグナは切り裂かれた。カインは宙で翻り、ドラゴンクロールを喰らわせんと向き直つたが

（！？）

そこに、ヘリアグナの姿は無かつた。カインは思考が追いつかず、何が起こつたか分からなかつた。

ワインディという種族が神速という技を使えることを思い出したところで、後に殺気が現れた。

「……君は、私のことを舐めているようだね」  
「しまつ……！？」

後先考らず、カインは上へ飛ぶ。彼の下レスレを何かが飛んでいつた。

「あの野郎……術式変換技を持つてやがる」

キンセツシティ代表の待機場所で、スピカは苦々しげに咳いた。

「さつきの、カインさんに放った技って龍の波動だよね」

ゼウスが状況を的確に述べる。

「ああ……なにぶんワインディが覚えられる程度に術式を書き換えてあるだけだが、ワインディは特殊攻撃力が高い種族だ……カインが一撃喰らって……耐えられるかどうかだな……」

スピカは苦々しげな表情を崩さない。

（まさかつたな……今のは……）

カインはさつきの自分を批判する。さつきのベリアグナの攻撃は、反射にちかい咄嗟の判断で避けられた。しかし、次は無い。また背中を見せて神速で背後に回り込まれたらあの技を避けるのは不可能である。

条件は、あのワインディに背中を向けないこと。背中を向けた瞬間、龍の波動が襲つてくる。

（でも……そんなことが出来るか？）

それは難しかつた。カインは敵の周囲を飛び回り、四方八方から攻撃を加える戦い方を主として使う。背中を見せない、ということはその戦い方を使わない、ということだ。

「まあ……そうじないと負けるつていうなら仕方ないけどな……」

カインは不敵な笑みを見せると、ドリラゴンクロールを右手に構え、ヘ

リアグナに肉薄する。だが、彼は本来のスピードではない。攻撃を加えたあと、すぐに後へ引けるよう、わざと速度を落としてある。

「ドラゴンク」

「火炎放射！」

カインが至近距離まで接近した時、ヘリアグナが炎を吐いた。

「龍の息吹！」

カインは紫色の炎で応戦する。

2つの技がぶつかりあつたものによる爆発でカインは飛び退った。カインは驚いてはいない。寧ろ敵が迫ってきたら技を放つ方が普通だ。

「龍の息吹！」

カインは爆発の跡の煙の中にもう一度、紫色の炎を吹き込む。

「龍の波動！」

だがそれはヘリアグナに簡単に打ち消されてしまった。

爆発による煙が晴れた時、

「神速！」

とこう声と共にヘリアグナの姿が搔き消えた。

(しまつた！－)

カインは焦りながらも、状況を打破しようと動く。燕返しであらぬ方向へ飛んで行つた。

壁にぶつかるという瞬間、軌道をカクン、と変え、ヘリアグナを振り払う。

だが、カインが燕返しを取りやめて地面に降り立つた瞬間、ヘリアグナは彼の目の前2mあたりにいた。

ヘリアグナはカインを嘲るように見つめて言った。

「私にそんな戦い方は通じない。君は“粉塵爆発”というものを知つていてるか」

「粉塵爆発つていうと……」

大気などの気体中にある一定の濃度の可燃性の粉塵が浮遊した状態で、火などにより引火して爆発を起こす現象。

粉塵ならカインの起こした砂嵐がある。だが砂は可燃性ではない。強いて言つならこのバトルステージが可燃性の物質でできているらしいが

「あつ……」

カインは背中に氷柱を差し込まれたような感覚を覚えた。

「岩碎きー！」

ヘリアグナは前足を床に打ち付ける。床は簡単に割れ、バトルステージを構成する物質の粉塵が舞つた。

「火炎放射！」

ヘリアグナは即座に粉塵に点火する。あたりに粉塵爆発が巻き起こ

る。

「ぐあつー。」

カインの体に衝撃が走る。ヘリアグナは砂嵐の強風の為、爆風には巻き込まれなかつた。

ドラゴンタイプに炎タイプは効果今一つなので、カインは致命傷にはいたらない。だが……

「ケホッ……！？」

やけに息苦しい。それもその筈、粉塵爆発は周りの酸素を吸つて起ころのだ。粉塵爆発の後の空気は一酸化炭素だらけで、いくら吸つても肺が満たされることはない。

（ダメ……だ……意識が！）

闇に吸い込まれていたカインの意識は

「龍の波動！」

というヘリアグナの叫びによって現実へ引き戻された。

だが、酸素を取り込んでいないカインの体は言つことを聞かない。

ドオオオオー！！！

と、いう音が響いた。同時に、砂嵐が止んだ。

『試合終』——！—— 第1試合——匹田の勝者はベリアグナ選手——！』

『司会のスマクローラの声が響く。観客席からワアアアと歓声が沸く。

「カインの野郎……負けやがつたな」

スピカが額に手を当ててている。

「次は……スピカだね」

ゼウスがボソリと呟く。

「ああ、……俺が負けたらキンセツは一回戦敗退といつことだな……しかし、分からんな」

「え？」

「テービスが自ら参加して、マキまで強制的に参加させて勝ちを狙う理由はなんだ？」

「あ……」

ゼウスはこれまで思つてもいなかつた事に言葉が詰まる。スピカはそんな彼に背を向け、

「まあ良い。俺は俺がすべきことをやるだけだ」

と言つてボロボロになつたフィールドへ向かつていつた。

カイン

「僕は……負けたのか」

まあそつ巻きこむなよ

スピカ

「俺が勝たないといけないな」

頑張れ

ゼウス

「いや、何この更新の遅さ（汗）」「

完結しそうな小説に全てを注いでいたから（汗）

スピカ

「今日は俺とマキの戦いだったな

「カインの野郎……負けやがって……」

俺は軽く舌を打ちながらバトルフィールドを踏んだ。1回戦第1試合2戦目。

俺とマキのバトルだ。正直デービスがマキをどう懐柔したのか気にならなかった。マキの体に傷が付いていないところを見ると、強制的に従わせた可能性は低い。

術式変換技開発の第一人者ともなると金で釣られるなんてこともなさそうだ。だとしたら何故？ 何故アイツはここに居るんだ？ 離れ離れになつていた実弟、ゼウスが大会に出席して、デービスに殺されるかもしれないというのに辞退すらしていないのもおかしい。何かがあつたんだ……マキとデービスの間でかわされた取引が……考えるのはよそう。分からぬことが増えるだけだ。今は目の前の勝負に集中すべきなんだ。

『それでは、スピカ選手、マキ選手の試合を始めます』

審判のエビフラーが旗を振り上げる。その瞬間、会場は静まり、誰かが唾を飲む音すら聞こえる。

カインが負けた以上、俺は負けられない。俺の敗北はキンセツシティ代表の敗北をも意味するのだから。

『ポケモンバトル、スタート!』

合図と共に、羽を広げ、マッハパンチを構えながらマキに向かって

「いや。対するマキは微動だにしない。何を考えて

「霰

「つづー？」

その瞬間、冷たい粒子が襲いかかってきた。しまった！

霰は氷タイプ以外のポケモンの体力を徐々に奪っていく技。その上グレイシアは“雪隠れ”という特性を持ち、俺から見えなくなっている。これは苦しい戦いになりそうだ……！

> 22365 | 1837 <

「ぐそ……銀色の竜巻きー」  
シルヴァートルネイド

銀色の竜巻きで霰を一瞬打ち消す。マキがいるのは……斜め前30m辺りか！

「マッハパンチ！」

マキの位置を確認すると共に再び吹き荒れ始めた霰の中を突き進む。

「馬鹿ね。私だって移動するんだよっ！」

その瞬間、全く別の方向から冷凍ビームが襲いかかってきた。ギリギリのタイミングでそれをかわす。

「うわしちゃつ……」

歯がみして周囲を見渡す。少し手荒だが……」「うごくか……。

「銀色の竜巻やー。」

銀色の竜巻きを何連続も繰り出す。霰が消えでは吹き荒れ、また消えては吹き荒れる。そして見た光景に俺は目を疑った。

マキは霰が消えることに違う場所にいる。テレポートを使っているのか?いや、それにしては移動が細かなような……。

「かはつ……」

しまった、術式還元技の使い過ぎと霰のダメージが重なって疲労がたまってきた……!

膝をついてしまいそうになる。でも、そうしたら俺の負けだ。マキは俺が動けなくなるのを待つていてるんだ……。

カインは包帯を巻いた体でフィールドを見つめていた。

「……あれはテレポートじゃない。影分身の応用だな

「どうこういって?」

ゼウスが聞き返す。

「影分身を使って幻影を見せてるんだ。本体はなんらかの手段を使つて隠れているんだよ。だからバトンタッチさえ使えば良い」「バトンタッチを使ってから自分が元いた場所に攻撃を加えればいい、ということ?」

「その通り。本体は動いたりはしない。場所さえ割り当ててしまえば簡単なことだよ。あとはスピカがそれに気付くかどうかだが……」

大会のルールとして控えの選手は出場中の選手にアドバイスを送ることはできない。

スピカは息を吐きながら周囲を見渡す。そして、あることに気が付いた。

何だ、この影の数は……？

苦しくなると分かつていながら銀色の竜巻シルヴァートルネイドを発動する。

すると、周囲に無数に憚つていた影は一つを残して消えた。その影はマキの姿を投影する。

スピカは再び銀色の竜巻を放つ。すると今度は別の影が投影された。

成る程、影分身を作つて銀色の竜巻の発動に合わせてそれを消し、移動したように見せる。そういうことか！

分かつてしまえば対処方は簡単だ。

「バトンタッチ！」

その瞬間、マキがギヨッとするのを感じた。バトンタッチによつてスピカとマキの居場所が入れ換わる。

スピカはさつき自分がいた方にマッハパンチを繰り出す。

その音速にマキはついていけなかつた。スピカの右手に、手こじたえがあつた。

Legend: 19 故のカラクリ（後書き）

スピカ

「結局俺は勝ったのか？」

それは次回分かるよ。

今回、前半はジャードの行動を覚えておかないと分かりませんw

ゼウス

「ちょっと（汗）」

ジャード

「つか、更新遅れたな」

……（汗）

アステリアーゼ

「お仕置きです」

ブイズの灯についての情報収集を終えたジャードは、ミシロタウンから帰ることにした。

「はあ、はあ……っ！」

ジャードは息を切らしながらミナモシティまでの道を走っていた。その黄色の体を、鋭い瞳が捕える。

「包围」

瞳の持ち主が指示を出した瞬間、ジャードの周りを幾多のポケモンが取り囲んだ。

「……テメエらは……」

赤と黒を基調とした体に、両手に着いた鍵爪。コマタナ、というポケモンである。

輪の外には、その進化系で、コマタナ達の頭領と見られるポケモン、キリキザンが控えている。

「暗黒の剣……」

ジャードは言いかけて、その可能性は薄いと判断した。コマタナ族はイッシュ地方と呼ばれる地域に多く住み、ホウエン地方ではありません姿を見せない。恐らく、海を渡ってきた盗賊団と考えるのが普通だろう。

（こやまて…… じんなずぶ濡れのピカチュウを盗賊が襲つ理由なんて無い……）

ジャードは、一瞬思考が迷路に入ったのを感じたが、「マタナの一匹が襲いかかってきたのを見ると、考えるのを止め、戦いに集中することにした。

「切り裂く！」

「電撃波」

襲つて来た「マタナは必中の電気技で吹つ飛ばされた。それを皮切りに、「マタナの軍勢が雪崩のように押し寄せてくる。いくらジャードでも、これは防げない。ゼウスであれば、いくらか凌ぐことはできるだらうが、今この場に彼はない。

「甘いな、バカ共」

だが、押し寄せてきた「マタナが斬撃を浴びせ、肉を剥き、鮮血を吹き出させたのは

彼等の仲間であつた。

「…？」

同士討ちで、血の海に沈んでいる「マタナ達には表情を変える余裕などない。驚愕をその顔に映したのは、頭領であるキリキザンだつた。

何故なら、先程殺そつとしていた相手が目の前にいたから。

「へそ……砂嵐！」

キリキザンが叫ぶと粒子の粉塵が吹き荒れた。粉塵は豪<sup>ゴウ</sup>！ と渦を巻き、

一瞬で消え去つた。

キリキザンは今度こそ、焦りを表す。そんなキリキザンに、ジャードは呼びかけた。

「時間が経てば砂嵐も必然的に収まる。御前、俺が誰だか分かつて喧嘩を仕掛けたんじゃねえだろ？」

「……時空超越者」

キリキザンがボソリと呟く。それを聞いてジャードは顔を顰めた。だが、次は肉厚的な笑いを浮かべると、拳を構えた。

「分かつてんなら問題ねえな？ いくぞ。時空断層！」

キリキザンには何が起つたか全く分からなかつた。

種明かしはこうである。ジャードは、キリキザンが感じる一秒を0.000001秒にしたのだ。

つまり、彼が1秒間分の動きをしたときにはジャードは100000秒間、つまり約3時間分の動きをしたことになる。どちらが多く攻撃を繰り出せるかは言つまでもないだろ？

「へへ……つあ……」

キリキザンを一頻り殴り終わつたジャードは、四つん這いになると

苦しそうに呻き始めた。时空超越は便利である分、それだけ体に負担もかかる。ジャードは血の塊を吐くと、立ちあがった。

そして、見た。

倒した筈のキリキザンが一つの傷もなく立っているのを。

「ゲホッ……な、に……？」

キリキザンは顔に嘲笑を張り付けて言つ。

「無駄だ。お前の拳など通じんよ  
「が……くそ」

ジャードは悔しげに呻いた。元不良の彼にしてみれば、自分の拳が通じないというのは悔しいことこの上ない

「もう満足だわ。やつと死ね

（やべえ！）

キリキザンは爪を振り上げ、ジャードの命を刈り取ろうとした。

ジャードは本氣で覚悟した。命の危機を。

「シャードークローー！」

紫に染まった左手が、ジャードを襲つて、その頸動脈を切り裂く

ことはなかつた。

「グアアアア！」

思わず目を瞑つたジャードの耳に届いたのは、キリキザンの断末魔だつた。ジャードがギョッとして目を開くと、目の前にあつたのは燃え盛る連獄、そして倒されていくポケモンの影であつた

「……な、何だ、これは  
「私が倒した」

その残酷な光景に、ジャードが顔をしかめていると、凜とした声が響いた。彼が我に返つて見上げると、そこには一匹のロコングいた。

お前は……レナティー、だつたか？」

ジャードの問いかけに対し、レナーテーは答えもしない。冷たい表情をキリキザンに向けたままだ

「キ、貴様……何者だ……」

「…………！」

キリキザンの顔に強い動搖が浮かぶ。

「時空超越者に手をだすといつなり、いいでお前を消し去る」

卷之三

キリキザンは倒れたまま這いつぶばつて逃げようとした。だが、レナテーは無情にも、炎を吹き掛けた。

「おひ、おこ！　いくじなんでもせつ過だひー。」

ジャードの制止も、レナテーには届かない。

ギュルギュルッ！

炎は魔方陣の形をとる。魔方陣はキリキザンの真上まで移動すると、中心から小さい鬼火を出す。鬼火は、キリキザンの体に取り憑く。すると、キリキザンの体はいくつもの光の破片となつて魔方陣の中心に吸い込まれていった。

「ぐ……！」

マキは脇腹にマッハパンチを受け、倒れそうになつていた。それで、四肢に力を籠め、なんとか立ち上がる。

「はあっ、はあっ……わ、私は、負けない……！　絶対……」

「マキ、止めてくれ

その痛々しい姿に、スピカは思わず制止を入れる。

「貴方に拳を向けるのは嫌だ。俺はそんな裏切りみたいな真似はしたくないんだ。だから、頼む。もう、やめてくれ！」

だが、マキの刺々しい視線は收まることを知らない。

「何よ？　フレアの子どもだからって、肩入れしてんの？　ふざけないでつー！」

「う……」

スピカはその言葉に口ごもるしかない。マキは更にたたみかけた。

「ゼウスだつてそつよ！ アンタが負ければこの後デービスとも戦わなくて済む筈よ。アイツと戦えば、ゼウスは絶対に殺されるに決まってんだから！」

なるほどな……

スピカはマキが参戦していた理由を知った。恐らく、彼女は初戦でミシロタウンとキンセツシティが当たることを知っていたのだろう。そして、ゼウスとデービスが戦うことを避けるため、自分がミシロタウンまで赴いて参加を申し出たのだ。若しくは、デービスから誘われ、ゼウスが死ぬことを恐れたために断れなかつたのだろう。

今のマキから見れば、スピカはゼウスを殺そうとしている重罪人に映つてゐるに違いない。

彼の言葉は、マキには届かない。絶対に。それでも、彼は語りかけれる。

「それは、貴方がゼウスを見くびつてゐるだけだ」  
「な……によ……」

マキがスピカを睨む。だが、その眼には霸気が無い。スピカを怯ませることはできない。

「デービス如きにアイツが殺される筈が無いだつ。何より、ここは公の場だ。殺しを行えば、即座に大会運営委員に拘束される。デービスも、ゼウスも、それは分かつてゐる」

「う、うるさい！」

「貴方が、俺の邪魔をしてゼウスを守っているところなら、それはただの偽善だ」

「黙つて！」

マキは涙をボロボロと零し、慟哭をあげる。自分の信じるものを使されないよう願う為の涙を。

「アンタなんかに、知つたつもりでいて欲しくないわ！」

その言葉が響いた瞬間、再び霰が吹き荒れ始めた。だが、ギュン！ と音がした。レディアンが覚える虫タイプの最高技、虫のせめきが走った音である。すると吹き荒れ始めた霰は徐々に鎮まり、霰がやんだ。

その時、観客が見たのは、横たわっているグレイシアの姿だった。審判のエビワラーが、右手に握った旗をあげる。戦闘終了の合図である。

第1試合2戦目  
ディアンだった。

激戦を制したのは、怪盗の顔を持つレ

## Legend: 20 並走する2つの謎（後書き）

スピカ

「ハツハツハ。勝ったぜ」

まだ分からぬよ？ 激戦を制したのは怪盗の名を持つレギティアン  
としか書いてないじゃないか。

スピカ

「俺以外に誰かいるかそんな奴！？」

うん、いや、いなけれど、まあ例外といつものはあるもので

スピカ

「タイマンバトルに例外があつてたまるかあああ！」

## Legend・21 残酷な真実（前書き）

今回、真実という単語が何回もでてきていたのかと思します。

ジャード

「作者の語彙力不足」

しょ、しょうがないじゃないか。y hoo辞書にも類義語でいいのが無かつたし。

ジャード

「それと今回かな～りシリアスなんだよな」

うん。これまでほのぼのとした話を気に入っていた人は要注意です。

「レ、レナター、いくらなんでもやりすぎだろー。」

先程から降り始めた雨が、その勢力を増し始めた頃、ヒワマキシティの西の日照りの岩戸の付近で、一ペアのピカチュウとロコンが対峙していた。勿論のこと、ピカチュウはジャード。ロコンはレナターである。

「あのキリキザンを消さなかつたら御前は死んでいたのよ。違う？」「だからって、殺すことはないだろー。」

ジャードはレナターの冷徹な感情に、苛立ちを感じた。

レナターの耳に巻かれたリボンの白炎が、彼女の代わりに答える。

「……キリキザンは捷に背き、タイム・リワインダー时空超越者に危害を加えようとした。貴様が死のうが死ぬまいが、どの道消すべだったのだ」

「捷……だと？」

ジャードが険しい表情から一転、訝しげな表情をする。レナターは後を向くと、背中に、二対の灼炎の翼を吹き出した。落ちてきた雨粒が、翼に当たつて蒸氣をあげる。

「今御前に教える必要はない」

レナターはそう言い残すと、灼炎の翼をはためかせ、飛び去つていった。後ろから、ジャードが手を伸ばして止まるよつ促したが、レナターに見える筈が無い。

天から大粒の雨が降つてゐるのにも関わらず、レナテーが纏つた炎は空の片隅に紅蓮の一閃を描いてゐる。

「撻……とは言つけど、もうそれに力は臨無よね」

炎翼を広げ、飛翔を続けるレナテーが、グレーの空の中へ咳く。

「ああ。 そうでなければ、 “暗黒の剣” などといつ組織は誕生しなかつたであろうな」

「 もう、 行かないとな……」

ジャードはずつと回士討ちでやられたコマタナに田をやつていたが、思ひたつて、ミナモシティへの道を進みだした。心中では、 “撻” “消す” “魔方陣” の三単語が不可思議の渦を巻いてゐる。ジャードは、訳も無い衝動に駆られて、弾けるように走りだした。

「 な……なんだってんだよ……」

ジャードの叫びが、周囲の木々に木靈する。暗い森の中からは何も聞こえてこない。

ヒワマキシティからミナモシティまではサファリパークを経由して、約10km程。ジャードの足では1時間程費やする。

「 はあ、 はあ……っ」

その1時間は、ジャードにとつては10時間にも、100時間にも感じられた。

そのまま立ち止まっているだけでも苦しいのに、走ることを止められない。草の根に躊躇して転びそうになる。それでも、走り続ける。

勢いよく地面を打つていた雨が遠のき、空を覆っていた雲の間から陽が差し始めた頃、送り火山の麓を通り過ぎ、ミナモシティに辿り着いた。潮騒の芳香が鼻を刺す。ようやく到着した、という安堵感から、地面に手をついてへたり込んでしまった。

「ジャードー？ アンタ、何処に行つてたのよー。」

俯いて息を切らしていると、聞きなれた声が耳に飛び込んできた。顔をあげると、パフィー、アステリアーゼ、デインがいた。

「ジャード、びつじたですっ。」

アステリアーゼが、心配そうにジャードの顔を覗き込んでくる。だが、彼は息切れで暫く話すのを拒んでいた。

「……随分長い時間走り込んでいたな」

デインが、ジャードの背中を摩りながら言つ。ジャードは、囁きながら、ようやく口を開いた。

「ゼウスは？ あいつの試合はどうなつている？」

「あと少しで始まるわよ。アンタ、昨日辺りからいなかつたけど、ビート行ってたの？」

パフィーが眉を吊り上げてジャードを睨む。勿論、彼を心配していた証拠だ。

「ミシロタウノ……」。…………あのわ……」

「何

「ブ

ジャードはブイズの灯と言おうとして黙りこむ。あんな厳めしげな物の存在を、彼等に教えて良いのだろうか？

「何よ。ブの後何て言おうとしたのよ？」

「……」

「……ジャード、黙つてたら分からぬ」

ジャードは、強い疑心に捉われた。彼等が、ゼウスの体内に異質な物体が憑依していると知つたら、彼等はゼウスをどんな目で見るだろ？

もう、友達ではいられなくなるかも知れない。自分は、ゼウスがどんな存在になつても彼の友であろうと決めた。でも、自分以外がそうであるとは限らない。誰もかれも、簡単に信じじふことはできないのだ。

「なあ、御前ら」

パфиー達は、ジャードの顔がいつになく真剣なのを見て、暫く凍りついていた。

自分が、知りたくない“本当のこと”を知らされるかもしれない。

「これから俺が言つことは、とても残酷なものだ。間違いなく、御前らの心を傷つける。それに、一歩間違えば御前らはゼウスの友達でいられなくなる。それでも、俺の話を聞きたいか？」

「な

「言つておぐが、俺の言つことは紛れも無い真実だ。俺の話を聞かないことは、眞実に目を向けずに逃げるってことだ」

パфиーは背筋に凍りを突つ込まれるような感覚を抱いた。他の一人を見ると、同じように顔に縦線を走らせている。

そのまま、時間がだけが過ぎていく。  
パфиーが、震える足で大会が行われているスタジアムの方に向き直つた。

「せつせと行きましょう。早くしないと、ゼウスの試合が始まつ「逃げる気か」つー？」

パфиーの言葉は、ジャードの冷たい声に阻まれる。

「さつきも言つただろ？俺の話を聞かない、というのは眞実から逃げるつてことだ。眞実を知つて、始めて理にかなつた行動をとれる。そだらう？」

「黙つて！」

パфиーの口から、感情の奔流が圧し流れてくる。

「残酷な眞実なんか、これっぽっちも聞きたくない！ 弱くていい！ 途中で逃げるような臆病者で構わない！ でも、友達が友達じやなくなるなんて嫌！」

全ての悲しみをぶちまけるように喚いた後、パфиーは目から涙を零しながら走り去つていった。

後に残されたアステリアーゼとテインは複雑な表情で押し黙つている。

「御前ら、聞くか？」

2匹は黙っていたが、やがてデインが前へ進み出て頷いた。  
一方アステリアーゼは

「私も……ゼウスを傷つけるべからざら、逃げ出した方がマシです  
そつ言つて去つていつた。

「デイン……。御前は聞くんだな？」

「……」

デインは沈黙を伴つて肯定する。

「俺は真実を教えるだけだ。その後御前がどう行動するかは御前が  
決めることだ」

「……構わない。現に俺は御前が時空超越者であると知つていて。  
でも、御前の友達である、という真実は変わらない。だから、ゼウ  
スがどういった存在であつても構わない」

その言葉は、ジャードに希望の光を与えた。

本当に暗かつたですね～

シャルフェアナ

「次の更新は遅れないように」

あれ、後書きに意外なキャラが

シャルフェアナ

「意外、というのは心外であります」

## Legend :: 22 発現（前書き）

ゼウス

「あれ？ 天と地でもひっくり返ったの？ こんなに更新が早いなんて」

失礼な。

ジャーナ

「いや、遅いのはこつもの」とだからな」

「……ゼウスが、死ぬかもしれない？」

「一步間違えばな」

デインが、顔に縦線を走らせて一步後ずさる。普段は内の感情が気取られない彼だが、今ばかりは彼が膨大な恐怖に包まれていることを感じることができた。

「俺が時空超越者であるのとは規模が違うんだ。……俺は言つべきことは言つた。後は御前がどう判断し、行動に移すかだ」

ジャードの冷淡な声も、『デインの耳には雑音としてしか入らない。デインは、掠れる声をやつとのことで絞り出した。

「……どうすれば……どうすれば死ぬのを止められる？」

その問は、ジャードを困惑させるのに十分だった。どうすればいいか、は知っている。だが、それを行動に移せ、と言われても出来ない。言葉で分かつているだけで、具体的なイメージは描けていないのだ。

「どうすればも何も……俺は“ゼウスの存在を下手に刺激しないこと”としか説明できないぞ」

「……そつか」

一抹の沈黙を間に置き少年は決断を下した。

「……ゼウスの存在がどんなに儂くとも、いつか訣別の時があると分かつても、俺は今、アイツの友達であることは変わらない。……それが俺の<sup>じたえ</sup>信念だ」

「デイン、……」

彼の言葉は、ジャードの心に希望を抱かせた。ジャードは笑みを浮かべると、デインに向直つてはつきり言つ。

「ありがとな。御前のお陰で、傷つかずに済んだ」

デインは呆気にとられた表情でジャードを見つめた。が、やがていつもムツツリした顔になる。

「……俺は自分の答を出しただけ。それは御前も変わらない」

デインはスタジアムの方を見た。今まさに、ゼウスの戦いが始まろうとしている。

「……ジャード、行くぞ」

「ああ。アイツの晴れ舞台<sup>くら</sup>には見届けておかないとな」

スタジアムから聞こえてくる歓声は段々と大きくなつていぐ。恐らく、試合開始まであと一分もないだろう。

「……急ぐぞ。アクアジュット」

不意にデインが電光の勢いで飛び出した。

「ちよ、待つて、デイン！」

ジャードはさう呟きながら高速移動でトインの後を追つ。

2匹が着いた時には既に試合は始まっていた。  
観客席に入りざま、審判が『ポケモンバトル、スタートー!』と言つたのははつきりと聞こえたが、ゼウスと、その対戦者デービスは睨みあつたまま動かない。

観客が湧きあがっている分、彼等の周りは静けさが支配しているようだ。そこに臨場して、実況が聞こえてくる。

『さあ、先程はマキ選手がスピカ選手に敗れ、両チーム1勝1敗となりました。この戦いによつて、2回戦に進むチームが決まります!』

ジャードは、その実況を聞き、驚愕を露わにした。

「マキ、だと?」

かつて、別次元再生タイム・リプロダクトで、ゼウスの過去を覗いたことがある。そこで知つたのだが、彼の姉の名前も、マキだ。偶然なのだろうか……?

まあ、どうでもいいか。

ジャードは頭の中の疑念を自己完結させ、試合を見つめた。ゼウス達はまだ動への兆候を見せない。

経常のような時間が流れ、スタジアムの喧騒もすっかり静まり返つ

た

ゼウスは、弾丸のよう<sup>に</sup>飛び出した。

「てやああああつーー！」

アイアンテールを構え、一陣の旋風の勢いでデービスの前に出て、  
鋼鉄の尻尾を叩きつける。  
もちろん、そう簡単に当たる筈が無い。デービスはドサイドン独特  
の<sup>の</sup>歯の腕で防ぐ。

ガキン！！ とひび割れた金属音が響き、体重が軽いほのゼウス  
が弾かれた。

「シャドーボール！」

ゼウスは着地の姿勢をとらず、両掌を向かい合わせ、漆黒の球体を  
作りだす。空中で一回転すると、球体は<sup>シャドーボール</sup>狙い違わずデービスに向か  
つていった。

デービスは大きく腕を振りかぶつて、力任せに振り下ろし、シャド  
ー<sup>ボ</sup>ールを叩き潰した。

「ハツ、こんなもんか」

あえなく潰されたゼウスの技を見て、デービスは嘲笑を浮かべる。

「……」

「噂程強い訳ではないのだな。もつとも、親が雑魚だったから当然

の成り行きかな

「なつ！」

ゼウスは、両親をバカにされ、眉を吊り上げる。

「もう十分だらう。わざと死ね

「ツー」

ゼウスは、デービスの“死ね”といつも葉に本気を感じて戦慄を覚える。

何故か、恐怖心は湧いてこない。

「……僕が、簡単に死ぬなんて思っていないよね？」

彼はそう言いながら体に力を溜め始める。

デービスは強気な姿勢で啖呵をきつたゼウスを見て何も言わない。

「なら、どれぐらいで死ぬか見てみるとしようか」

デービスは、右手を前に突き出した。

だが、ゼウスの中には、今や絶大な力が籠っている。後は、その力を押し出すだけである。

「そう。……貴方が生きている間には無理だよ

ゼウスの眩きと共に放たれた一発。彼は、完璧に自分が切り札を放つたと思い込んでいた。しかし、彼の体から放たれたのは吹き荒ぶ若葉の嵐。

「な

」「！？」

茫然と口を開けたまま立っているデービスに、若葉の嵐は襲いかかる。そこを通り過ぎた後には、傷だらけのデービスが、瞳に憎しみを燃やしてゼウスを睨みつけていた。ダメージは大きかったようだが、戦闘不能には至っていないらしい。

「ゼウス……面白い奴だ。ますます、その命を刈り取りたくなった」

デービスの言葉が、壊す両者の留め金。2匹の動きは爆発的に激しくなった。

## Legend :: 22 発現（後書き）

アステリアーゼ

「何だか物騒な終わり方です」

うん……今までほのぼの系だったけど、少しずつシリアス期に突入していつてるね？

アステリアーゼ

「怖いです」

「ごめん」「めん（汗）

明るくかわいいのがどんどん暗くなつていつてるなあ……

ゼウス

「わざと暗い話にしてよ」

ジャード

「作者みたいな馬鹿がシリアルスな話をかけるなんて思わなかつた」

失礼な。まあ、バトル大会の終わりには明るい話を聞けるようになります

会場は騒然となつた。

『なんと、先程放たれたのは……リーフストームでしょうか！？』  
『いえ、リーフストームはまだ威力を抑制できるようにしてあります。あれは……技のカテゴライズに当たるのでしょうか？』  
『ということは……あれは新技、ということになるのでしょうかね？』

『現状ではそうなるでしょうね……』

実況と解説のポケモンが真剣な口調で声をかわす。だが、ジャードはそれが技でないことを知つていた。

イーブイというポケモンのみに憑依し、異能の力を発現させる、兇器なる物体『ブイズの灯』。

「今は……リーフィアの力だな」  
「……今のがブイズの灯の力か？」

デインの間に、ジャードは荒んだ表情のまま頷く。別に、ブイズの灯が発現しようと、彼等に何ら被害があるわけでもない。ゼウスにも、今のところ甚大な損傷が見られたわけでもない。なのに、嫌な予感ばかりが募る。

「うう……」

観客席の片隅。

パфиーは地面の両手を着いて荒い息を吐いていた。流れる汗が、禍々しく輝く。

「パ、パфиー、大丈夫です。しつかりします」

アステリアーゼがパфиーの横で必至に呼びかける。だが、パфиーは嗚咽を我慢するあまり立ち上がるどころしない。

「何でよ……っ、知りたくないって言つたのに……だから逃げたのに……」

パфиーは真実に背を向けた。訣別を繰り返さないよつて。だが、結局は同じだつた。ゼウスの秘密を田の当たりにし、絶望の奥底に墮とされ慟哭する羽目になつた。

「パфиー……」

必至に呼びかけるアステリアーゼの声も、哀しみの響きが籠つている。

「やだ……アイツの秘密なんて、知りたくない……触れたくも無い！なのに……」

「……私も、いやです……このままじゃ、皆との絆が……」

アステリアーゼがボソリと呟き、戦場を仰ぎ見る。戦いの火蓋は既に切られたらしく、デービスとゼウスは激しい乱闘を繰り広げていた。

「……ジャード、今のが……」

同じくスタジアムの片隅で、ジャードとテインが深刻な面持ちで立つている。

「恐らくな。俺はブレイズの灯の発現を直接みたわけじゃないから分からぬが、アレがそんなんだろう」

ジャードは一しきり言い終え、ある考えに頭が巡りついた。

ゼウスの頼みの綱、とも言えるフォース・チエンジ術式変換技。ゼウスがある技を出す時の動きと、今のブレイズの灯の発言の時の動きが酷似している……

その考えが正しければ、ゼウスは知らぬ間にブレイズの灯を体内に憑依させるという選択をとつてはいることになる。

「ダメだ……違う、絶対に違う…… そんなことが、ある筈が無い……」

…

ジャードの台詞は力強いが羨望に満ちて、違う、と言い切りながら何処か信じられないでいる。

「違う…… それに、そうだからといってなんだと云つんだ…… 実際にやつだからって、ビリとこういとは無いだろ!!……」

ジャードは、先程パフィーに「逃げるのか」と罵詈雑言を吐いておきながら自身が現実から逃げてしていることに気が付く。でも、仕方が無

かつた。現実がこんなに醜いと知つておきながら、まだ立ち向かうとする自分が馬鹿だった。

「……ジャード、落ち込むな。未来に希望を持つ……」

デインが弱々しく咳く。それにジャードはハッとして、幾分か元気を取り戻す。立ち向かう、と言つても、自分は孤独な存在ではない。数年前まではそうだったかもしれないが、今では心から信じあえる仲間がいる。手を取り合つて進みあえる、友がいる！

ジャードは姿勢を正し、笑みを浮かべて咳いた。

「有難う。危うく絶望の渦に引き込まれるかと思つたよ」

「シンクロノイズ！」

ゼウスの放つた音波は、テービスの拳と触れ合つた瞬間に露と消えた。

さつき、ブイズの力が発現した。損傷は大きかつたようだが、テービスには致命傷ではなかつた。

「アイアンテールッ！」

今度は、弾丸のように飛び出して、サマーソルトの要領で鋼の尾を叩きつけた。

だが、それもテービスの二の腕に弾かれた。ゼウスは敵の技を喰らう前に、即座にその腹を蹴つてテービスの前方15㍍辺りの地面に着地する。

「はつ、さつきから無鉄砲に技を出すだけか?」

「デービスはお得意の嘲笑を混ぜながらゼウスを見下すように言う。それに対し、ゼウスも力強い笑みを浮かべる。

「そう思つてゐるのなら、貴方の敗北は目に見えてるね

「……」

自分より、4周り以上も小さい相手なのに、何故かその笑みが自分という存在を消し去つてしまいそうで、デービスは心の底から震え上がつた。

『さあ、気を取り直しまして、ゼウス選手、先程から技を積極的に出してゐる様子が見られますか……なかなかあたりませんね』

遠くから、実況の声が聞こえてくる。ゼウスはそれに、恥辱を感じることもなかつた。

「自分の失策を悟つてから、後悔しないでよ? 電光石火!」

デービスの腹に、敏速にぶつかつてから、素早く飛び退る。目の前を疾風が撫でた。デービスの拳だ。

電光石火は、ノーマルタイプで、そこまで威力も高くない技だ。一発当てたところで、岩タイプのデービスには屁とも思われないだろう。

「シンクロノイズ!」

耳をつんざくよくな雑音を伴つた衝撃波が空を裂く。それに対し、

デービスは拳を地面に叩きつける。

「ストーンエッジ！」

拳が地面とぶつかった瞬間、無数の岩の破片が地面を突き破つて飛び出してきた。そのまま、シンクロノイズの壁となつた。

「惜しかつたかな……」

ゼウスは失笑を浮かべる。だが、その失笑すら、次には消えていた。

「もう十分暴れ回つただろう。そろそろ死ね。罪人の息子」

デービスは目を吊り上げ、憤怒の形相になる。そして、またも地面を殴る。

「岩石封じ」

デービスと同じくらいの大きさのフィールドの破片が、地面から離れる。

それは、ゼウスに引き寄せられるように動いた？

ゼウスは、無数の岩に押し潰されて、その姿も見えない。

デービスは、地面に手を突つ込む。引き抜くと、直径30cm程の

大きさの岩が握られていた。

その岩を、ゼウスが閉じ込められている岩に向かって構え

「岩石砲」

音速で、打ち込んだ。

パフィー、アステリアーゼ、ジャード、デイン。  
岩石砲が打ち込まれた瞬間に、皆息を飲んだ

えへ、我等が主人公ゼウス、死す。

全員

『はあー…?』

いや、冗談冗談。ホントに死んじやつたら物語終わつたりやしないでしょ?

ジャード

「び、びっくりした……」

パфиー

「で、どうなるの、」の後。生かしておくんでしょう?」

うん。まあ色々と……

## Legend: 24 決着（前書き）

とりあえず、スケジュール通りには出来てます。一応。

ジャード

「オイ」

パフィー

「それからなんか今回短いとかほざいてたんだけど……」

はい。これでもかつてくらい短いです。文字数は一応1000字に到達しておりますがww

辺り一帯を、沈黙が支配する。

たつた今、砲石砲を打ちこまれた岩の塊は見るも無残な姿で崩れ落ち、その中に封印されていたゼウスはまだ土煙のせいで見えない。

『あつと……これは、ゼウス選手はどうなるのでしょうか……？  
仮にゼウス選手が死亡した場合、デービス選手にはそれなりの懲罰が課されることになるのですが……』

実況の声は、幾分驚愕を抑えてあるがその中にある緊張を隠す「」と  
はできていなかつた。

「……終わったな」

デービスが口の端を持ち上げ、不敵な笑みを見せる。

「あ……ゼウス……？」

「そ、そんな……嘘です……死んだなんて、幻想です<sup>まやかし</sup>」

パフィーとアステリアー、ゼは身を乗り出してフィールドを見ている。  
2匹とも、目に大粒の泪を溜めて。

「お、おい……ゼウス、冗談じやすまないぞ。せつせと、田観めて  
飛び出して来いっ」

ジャーードは未だに目の前の光景が信じられないのか、呂律の回らな  
い口調で変なことを口走っていた。そばにいる、ディンのみが冷静

に、否、冷ややかにフィールドを見降ろしていた。そして、氷のような声で一言。

「……まだ、死ぬには早すぎる」

フィールドの土煙が晴れたのは、鎮まっていた空間が、阿鼻叫喚の地獄絵図に差し替わってからだった。

そこを見て、観客の皆誰もが息を飲んだ。

ゼウスの姿は無い。肉片一つすら、見当たらぬ。

「何！？ 何処へ行つた！？」

それを見たデービスは焦りから突然に声を荒げた。だが、彼がゼウスを探そうとその1歩を踏み出そうとした瞬間、自分の体が硬直しているのに気が付いた。

「かかつたね。デービス」

背筋に氷柱を刺し込まれたような感覚を覚えたデービスに、嘲りの声が背中から届いた。

彼が放つた砲石砲は高威力を誇る代わりに、直後の動きは一切制限される技だ。自身の自慢の逸品を使つたと思つていたら、逆にそれが命取りとなつた。

「ふん。どうせ岩石封じに閉じ込められる寸前に電光石火を使って逃げ出した、とやつことだらう？」

「正解だよ。寧ろそのトリックに気付かなかつたら脳に支障がでてるかも」

ゼウスの言葉は、デービスにとっては勝利の宣言にしか聞こえなかつた。

「これで終わらせて貰うね。切り札」

彼がそう言つると同時に、技を放つのに必要なエネルギーの集結がある1点に集中した感覚が押し寄せてきた。

デービスは最後の足掻きだろうか。強がりを言つた。

「ふん。御前の切り札とは言え、所詮ノーマルタイプの技を、術式を書き換える力を強くしたものと変わらんだろう? これで俺が終わつたと思うなよ」

すると、ゼウスの言葉に含まれる嘲笑の度合いは更に増えた。

「デービス、分かつてないね」

「何

」

余裕の表情を保つたままの彼の顔は、次の言葉を聞いた瞬間に仮面を被ることを忘れていた。

「確かに、僕の切り札は術式を書き換えてある。でも貴方は大事なことを見落としているんだよ? 僕の切り札は、切り札の技が本来持つ『別の技を出す度に威力があがる』という性質を備えもつた上で威力を高いものに書き換えてあるんだから」

彼の覚えている切り札は、何も技を出していなくても破壊光線と同等の威力がある。だからと言って、威力が変化しないわけでも、技を放つた直後に動けなくなるわけでもない。技を出せば出すほどその分強くなつていく。

先程、ゼウスは何度技を出しただらう？　恐らく、手の指のみでは数えられない。否、足の指を加えても数えられないほど、彼はその下積みとなる技を放っていた。

「もひ、分かつたよね。ならこれまでの分の仕返しを、きっちりしてもらひうから」

ゼウスはそう言つて技を放つ。そこで呼び出された爆発は、神々の技にも肩を並べるほどに凄まじいものだつた。

一閃の煌めきの後、デービスが軽く宙を舞つた。

バトルリーグ1回戦第1試合キンセシバシロ。勝者は、言つまでも無い。

## Legend...25 戦いの後の悲しみせ（前書き）

最近、暗い鬱屈とした話が続きますが、今回も暗い話です。

ゼウス

「もうそろ明るい話に入ってくれないかな……」

バトル大会の2回戦は明るい話にできるんじゃないかな、と思つ。

ジヤード

「よし、約束したな。2回戦でドス暗い話だつたら10万ボルト30秒間の刑」

え！？ ちょっと待て、今の取り消し (口塞)

「テービス……」

ゼウスは、薬の臭いが充満した病室で、懇々とベッドで眠り続けている怨敵の顔を睨みつけた。だが、いくら睨めつけてもテービスの瞼は動こうとしない。

「ゼウス、おめでとう」

不意に、後ろから声をかけられた。振り返ると、いつもの友達が、彼が勝ったというのに、晴れない面持ちで立つっていた。

「……有難う」

テービスのベッドから飛び降り、4匹と向かい合つ。彼は、罪悪感に駆られてそれだけ言つのが精いっぱいだった。

「うん……でも、その前に」

刹那、パフィーが顔を強張らせた。その目には、大粒の涙が溜まつている。ゼウスは、それが何を意味するか 予知ができた。

「アタシ達に心配かけた、その償いをしなさいっつー!!」

パフィーは短い腕を一振り、ゼウスの頬に平手打ちを喰らわせた。そのまま背を向けると、走り去っていく。

「アイツも、相変わらずだな」

ジャードは苦笑いを浮かべながら、パフィーが走つていった方を見る。その瞬間、彼の顔から全ての感情が死絶えた様な気がした。

「……いつも癪癩を起しては、すぐに機嫌を直す。……おでんば

デインが愚痴をこぼすが、その様子に鬱屈とは見られない。

「……で、テービスの野郎はどうしてんだ?」

「それが……起きなくて」

「う、うう」

「!-?」

ゼウスが言いかけた時、テービスが呻くのが聞こえた。

「テービス、起きたのか」

ジャードが、声を低くして訊ねる。テービスは、目を開けていたが、暫く口をパクパク動かしていた。やがて、そこから掠れた声を出し始める。

「ここは……どこだ? 私は、何をしている?」

「テービス!-? 起きたのか!-?」

ゼウスは彼のベッドに飛び上がり、その瞳を睨みつけ、驚きの溜息を漏らした。

戦っている時は、濁つていたように見えた、その黒い瞳が、今は美しい色を湛えている。まるで、彼の心から邪悪な感情が抜け落ちたことを示唆するかのように。

「サービス……？ それは、私のことか？」

今のサービスの一言に、ジャード、デイン、アステリアーゼの皆が息を飲んだ。まるで、サービスが彼の体を持ちながら彼でなくなってしまったようだ。

「どうこうことだ？」

ジャードがうろたえていると、後に誰かがいる気配を感じた。振り返つてみると、アーサー、カイン、シャルフェアナが立っていた。

「卿？ どうかしたか？」

その言葉に、デインとアステリアーゼも振り返り、ゼウスはベッドから飛び降りた。

「1回戦が終了した折にいさか不審点があつたので、調べ物をしていたのですが……」

アーサーの代わりに、シャルフェアナが答える。そして、カインが続く。

「何年も前に発行された新聞を調べていたんだ。そしたら、面白い記事があつてね」

カインはそう言つて、ジャードにその新聞を手渡した。ジャードはその記事を読みあげる。

「……ドサイドン、行方不明……だと？」

その記事に記されていたのは、ハジツゲタウンで1匹のドサイドンが失踪した、という記事だった。そのドサイドンの名前はヴェイスマン。失踪した年はポケモン歴402年。今はポケモン歴で414年だから……

「12年前の記事か……」

「そう。で、そのデービスとやらがミシロタウンの領主になつたのも、幸か不幸か、12年前なんだよね」

カインはそつまつと、一ヶと口の端を持ち上げながらもつ1部の新聞を取り出す。そこにはでかでかと、『ミシロタウン、領主交代』と書かれていた。

「ぐ、偶然だよ……！」

ゼウスは、そう呟ぶことでは口が言いたいであろうことを否定する。だが、アーサーは冷酷に言葉を紡ぎ始めた。

「これは私の想像だけどね。ヴェイスマン、というドサイドンは12年前にある組織に連れ去られた。その後、何らかの方法で洗脳されて、『デービス』という仮りの名前を与えられた。そして、当時のミシロタウンの領主をその地位から蹴落とすと自分が領主に成り上がつたんだ。12年後、君の一撃で、眠っていた“ヴェイスマン”としての彼の記憶が蘇えり、洗脳後の記憶は焼き消されてしまったというわけだ」

「そんなの、卿の想像でしょ？ 一証拠はあるの？」

ゼウスは困惑のあまり、敬語を使つことも忘れていた。だが、アーサーは冷静に、残酷に、答を返す。

「証拠はない。でも、私の想像を裏付けるものはある」「

アーサーはそう言つて、ヴェイスマンと連しきドサイドンが寝ているベッドへ歩み寄る。途中でゼウスが引き留めようとしたが、勿論無駄だった。

「……貴方の名前を、教えて頂けますか?」

「……」

ヴェイスマンと思しき者は、今までとは信じられないような沈痛な表情で、答えるのを躊躇つてゐる様子だったが、

「……言いたくは無いが……先の話題にもあった、ヴェイスマン……」

「……」

瞬間、ゼウスの表情に一抹の絶望がよぎった。

「それが、私の名だ……」

ゼウスは、目に大粒の涙を溜めながらも、それを零さないように震えている。カインが、重苦しい表情で最後の希望を断ち切る。

「後を……実は戦闘前と戦闘後のデータービス……ヴェイスマンの脳波を調べさせてもらったんだ」

ジャードが、頭を伏せる。

「戦闘前は、とても不規則な波だったのに、戦闘後はいきなり規則的になつてゐる。偏に、データービスがヴェイスマンに戻つた証拠だよ

「そん、な……」

ゼウスが、目から涙を零す。それは、彼の足元に、喜びに絶望の穴を穿つように墮ちていき、やがて大きな水たまりを作った。

「卑怯だよ！ やつと、敵を討てると思ったのに……記憶を失くして、自分は何も知らない、善人ぶつた顔をするなんて！」

熱い感情の塊が、奔流のようにその口から零れ出る。

「自分は好きなだけ悪いことをしていて、その身が危なくなつたら記憶を失くすなんて、……こんな……こんな理不尽なことがあつてたまるかつつ……！」

言葉の鎌が、ゼウスだけでなく、ヴォイスマンの心にも、ジャードの心にも、デインの、アステリアーゼの、アーサーの、カインの、シャルフエアナの心にも刺さっていく。

ヴォイスマンは、細い声で、しつかり呟いた。永遠の贖罪を負わされた罪人のように。

「『めんな……本当に『めんな……私ができることならなんでもする。手でも、足でも、目でも、何でも差し上げる。それが、私の償いだ……』

ヴォイスマンの贖罪は、ゼウスには拒絶されてしまいそうに思われたが、彼は何も言わなかつた。

えつと……前半は暗いけど少し鬱屈感が消えています。

ゼウス

「後半は？」

かよつと世の世のとじてるかな？ ゼウスとパフィーのやり取りがないけど、

陽が傾いて、夕方と正午の丁度境目の辺りの時間。どちらともとれない不明瞭な感覚の中。

「ジャード、力が欲しくはない?」

ゼウスの涙を見て、居心地の悪さを覚えて、外に出ていたジャードの背中に、澄んだ、しかし鋭い声が突き刺さつた。

「……お前か」

彼が振り返った先には、ロロンの少女、レナティーが凜とした表情で立っていた。

ジャードは嘲笑と共に、彼女の質問を一蹴する。

「力なら既に持っている。タイム・リワインダー時空超越者としてのな

「本当? もっと強い力が欲しくはないの?」

ジャードの顔に、更に強い嘲笑が浮かぶ。

「力が必要なのは俺じゃない。ゼウスや、デインや、パフィーや、アステリアーゼ……」

「そつかしら? 力を手に入れた。そして自己崩壊していったのはゼウスじゃない? それでもゼウスに力が必要というの?」

レナティーが鋭く切り返す。ジャードは、感情がはち切れそうになるのを我慢して言う。

「アイツが力を持ったのは誤りか？ 過去の悲劇を繰り返さないよう アイツは力を手に入れた。違うか？」

「違わないわ。でも、そのおかげでブイズの灯火を背負つことに つたのよ」

その言葉を聞いた瞬間、ジャードは自分の推測の正しいことを確信した。ブイズの灯火の正体は、フォース・チエンジ術式変換技だ！！

「それに、貴方は何も過たずに力を手に入れられるわ。貴方は『ディアルガの器』なのよ」

「器……？」

「貴方だけに、教える。他の奴に教えたらぶち殺すわ」

決してハッタリとは取れない脅しに、ジャードは全力で首を上下に振った。

「よろしい。器というのは、神のポケモンないし、神話にでるポケモンないし……彼等を保存しておくポケモンのことなの」

「つまり、俺の体の中にはディアルガがいる、ということか？」

ジャードの推測に、レナターは満足そうに頷いた。

「理解が良いわね。その通りよ。かくいう私も器。白炎のね」

レナターはそう言って耳のリボンを撫でた。ジャードはそれを聞き、一つの質問を投げかけた。

「白炎……お前は何者だ？」

だが、その答が帰ることにはなかつた。

「今は答える」とは出来ぬ。レナテー、行くぞ。もつすぐ汝の試合  
が始まる」

「試合だと？」

「分かつたわ。じゃあね」

レナテーは不敵な笑みを浮かべると、ジャードに何かを握らせた。  
そして、背中から紅蓮の双翼を発現させ、飛び去つていつた。

「……俺の中に、ディアルガ？」

ディアルガ。実物を見たことは無いが、前に本で絵を見たことが  
ある。鋼の手甲に守られていて、知的な群青色で、その絵のディア  
ルガは時計を湛えていて、まさに時を司る神のようだ

まさか！？

そこまで考えて、ようやく及ぶべきところに及ぶ理解。自分が時  
空超越者と呼ばれる所以。その能力の由来

俺の中にいるディアルガの力なのか！？

彼は晴れない面持ちで、レナテーが渡したものを見て、ハツと驚  
愕の表情を浮かべた。それは、ダイアモンドで作られたペンダント  
だった。ペンダントは、どこも変わらない、普通のそれに見える。  
眩い光を放つていなければ。

「ま、眩し……」

彼は、田を覆おうとして、その手を止めた。田の前にいるのは、かつて神話の本で見た、時を司る神

「ディアルガ……！」

あの、伝説のポケモンだった。もとも、実物ではなく映像だが。ディアルガは、ジャードを見下ろすと、ゆっくりと、機械的な平淡な声で言った。

『器の存在を、確認。金剛珠と協調』

そして、光の粒子となつて、ペンダントに吸い込まれていった。残されたジャードは、何も言わない。ただ、頭の中で色んな感情がせめぎ合つている。

レナードが、大会に出場していること。ブレイズの灯のこと、パフィーとゼウスの仲違いのこと、そして、時空超越者という自分

「俺は……どうすればいいんだよ……！」

ジャードが抱えた頭の中に、威厳を含んだ、しかし、どこか軽薄さが窺える声が響く。

『どうした、俺の器』

「黙れ。か、勝手に俺の体に住みつきやがって……！」

声の主がディアルガであることは、容易に想像がついた。よく見るとその声はペンダントから発せられていた。

『お前が近づいてくれたお陰で、俺も金剛珠から覚醒する』ことが出来た。何か心憂きことでもあるか？ 相談に乗るぞ』

「……」

随分と接しやすい神だな。と思いつつ、ジャードは彼に相談しても良いか迷っていた。

『ヒワマキシティ、圧勝でしたねえ』  
『そうですね。偏にレナティー選手の活躍が大きかったと言えるでしょうか』

ジャードの中のデイアルガが覚醒してから約20分後。1回戦の最終試合が終わっていた。

ハジックタウンとヒワマキシティの試合は、ヒワマキシティ側の、レナティーというロコンの少女が大きな活躍をしたらしく、華やかな勝利を収めていた。

「あのロコンさん、なかなか強いです」

アステリアーゼが、感嘆の声を漏らす。

「僕もあんな風に強くなりたいな……」

ゼウスが、誓いのように呟いた。デインも、目を見開いて、その強さに傾倒しているようだった。パフィーはまだ怒っているようで、そっぽを向いていたが、試合の様子が気になるらしくたまに振り返つて、そわそわしたようだった。だが、

「……なかなか、素直じゃない」

ディンがそつと、田を二角にしてそっぽを向くのであった。

「ゼウス、次は何処です?」

アステリアーゼが尋ねると、ゼウスはパンフレットを取り出してじつと見つめ、やがて顔をあげて答えた。

「シダケタウンだ。でも、試合日体は明日だよ」

その声は明るく、邪氣が一切見られず、さつきまで泣いていたのが嘘のようだった。

「そうですか。明日も応援するです。ね? パフィー」

パフィーはいきなり呼びかけられ、仰天してこちらを向いてしまつた。ゼウスと目が合つて、いきなり後ろに向き直る。その顔に、違和感があるのに気付いたのはディンだけだった。

作者がこの小説を読み返して気付いたこと。

恋愛描写がない。これはいけませんねえ。ちょっと一段落着いたら恋愛系の描写を入れます。

パфиー

「無くて良いくわよ」

いやいや、君には必要なんじゃない?

パфиー

「い、要らないわよ!」

ティン

「……モテたい」

「テイン!?

ああ、結構遅れてしましましたね（汗） およそ20日あまりのブランクでしょうか。次からは気をつけたいと思います。

ゼウス達が、帰ってきたジャードを迎えたのは夜の10時のことだった。

「お帰り、ジャード。遅かつたね」

「あ、ああ。色々とな」

「どうしたの？ 顔色悪いわよ。それにそのペンダントは向う  
パфиーが彼の首から下げられた、ダイアモンドを飾ったペンダントを指す。ジャードはそれを隠すこともせず、ただ見つめるだけだ。

「ああ、これはちょっとした事情から手に入ったんだ」

「……事情？」

「何かあつたですか？」

デインとアステリアーゼの質疑には答へず、ジャードは體白にな  
り、苦しそうに顔を少し下に傾けた。

「さあ、もう寝ようぜ。俺も今口は予定外の外出があつて疲れてい  
るんだ」

「え、ちょっと、何があつたかは言へなきことよ」

自分が話を聞きたくないと言つたのを棚に上げ、ジャードに聞い  
詰めるパфиー。だが、彼はそのままペンダントを外すこともせ  
ないベッドに潜り込むといぎきをたて始めた。

「私ももう寝るです」

アステリアーゼも欠伸混じりに言いながら部屋をでて、寝室に向かつた。

「む……」

「ね、パфиーももう寝たら?」

「うつさいわね。何でアンタに指図されなきゃいけないのよ

パфиーは目を三角にしてゼウスを睨むと部屋を出た。因みに、ディンは既に安らかな寝息をたててている。

「ジャード、ゼウスはどうだ?」

「ディアルガ、皆とこるときに乗るなよ」

皆が寝静まつたと思ぼしき頃、時空超越者に力を与える神、ディアルガが金剛珠の中から話しかけてきた。

「分かつてゐよんなこたあ。で、どうなる?」

「どうなるつて……俺に、これから先の時間を見ると書つのか? 見てもいいが、それが正しい未来とは限らないんだぞ?」

ジャードは呆れた口調で返した。

彼の言うとおりである。ジャードは、時空超越者<sup>タイム・リワインダー</sup>の力を使って、過去だけでなく未来も見ることができる。

だが、この先の時間軸は、いくつも選択肢がある。彼が見られるのはそのうちのたつた一つだ。所謂、パラレルワールドといったと

「うだ。

「それでも良いぞ。見てみる。悪い未来だったら、それは俺達が選ばない未来。良い未来だったら、俺達が選ぶ未来だ」

「ふん……やけに楽観するんだな」

「俺は将来に希望を持っているんだ」

ディアルガの口調は、氣力の抜けたジャードのそれとは違つてい、力強く、輝かしい。自分達が苦しい時でも、希望を持つて生きて、こうこう強い意志が見てとれた。

「成る程……もし、悪い未来を見て、それが確定したら絶望こそ大きくなるだろ？が……。まあ、それまで大きく希望を持つておくといつのも味なものだ。さて、良い夢でも見るかな」

ジャードはそう言って、頭の中で時空超越タイム・リワインドを発動させた。

「う……れ……起き……」

「う～ん……何～？ フアアア……」

「いこから、起きてと起きなさいー。」

ゼウスは、耳を劈く怒声と幾度も襲う揺れによって目覚めた。いや、目覚めさせられたといった方が正しいのだろうか。

「ひゃあああー？」

「アンタ、起こされたら一回で起きなさいよー。」

その怒声の主であるひしーパフーが目を二角にしてゼウスを睨

む。それをみて、ゼウスは怯えたのか俯いてしまった。

「アンタは、今日2回戦が控えているんでしょ？ わたかと準備しに行きなさい」

パフィーは、ゼウスがその言葉を聞いて弾かれたように飛んでいくのを見届けると、次の生贊であるティーンの所へ向かっていった。アステリアーゼが彼を起こしているが、彼もゼウスと同じく、一向に起きる気配が無い。

「ティーン、わいつか起きなれこつー！」

彼女がそう呟ぶと、ティーンはおろかアステリアーゼを驚いて飛び上がった。

「……もひ、朝か」

「そーよ。アステルが起こしてあげてたのに、何で今まで起きないのよ」

パフィーは厭味つたらしく言こながら、ジャードとこつ名の次に生贊に囁きやつていたが、意外にも（彼女からすれば予想通りな）だが（）ジャードは起き上つていた。

「ジャードはひやんと起きてゐるつてのに……つてびつしたのアンタ「顔色が悪いです、ジャード。何かあつたですか？」

「ん……こや、何でもない……」

ジャードは、顔に縦線を幾つも降らし、顔も強張らせてこる。

「心配すんな。ジャードは悪い夢を見ただけだつて

「あ、そうなの……え？」

突如聞こえた謎の声に、パフィーは呆けた声をあげた。この部屋には、パフィー、アステル、ジャード、ディンの4匹しかいない。今の声は、その中の誰のものでもない。ジャードが冷や汗を一筋垂らした。

「……今の声、誰？」

「あん、俺のこ」

ジャードは首からペンダントを外すと、傍にあつた壁に何度も打ち付けた。打ち付ける度に、ペンダントの中から「ギツ、ゲツ、ゲハツ」と声が聞こえてくる。怪談やグロテスクが嫌いなアステリア一ゼが悲鳴をあげた。

「きやああああつーー よ、妖怪ですーー！」

「（……テメハ。寝る前に皆とこるときたに蝶のなつたのを忘れたのかこの野郎）」

「（お、おいゲハツ。だからつてンガつ。こつ何度もシングホツ。叩き付けなくてもベヒツ。良いじやねえかクジエツ）」

ジャードとペンダントの中のティアルガとの間で繰り広げられる無言の会話。先程の声の主は、いつまでも無くティアルガである。

「（黙れこの阿呆。皆に説明するのが難しくなつちまつただろうが。大体、昨日も俺にあんな悪夢見せやがつて）」

「（あ、あれはお前が自分の意志で見たんであつて確かに俺はそうするよつたけれどもお前に拒否権はあつたわけで、別に俺が悪いんじやあああああー）」

やがて叩きつけるのも飽きたジャードがペンダントを、小さな両掌で圧迫し始めた。その瞬間、ティアルガは断末魔をあげ始めた。勿論、皆に聞こえている。

「きやああああっ！ 出たですーっ！」

「あ、アンタ、そのペンダントは何よーー？」

「……幽霊？ ……成仏できなーいとか？」

「いや、これはだな……」

ジャードが状況を説明し終えた頃には、ゼウス達キンセッシティの試合は始まるうとしていた。

## Legend: 27 出たーっ！（後書き）

さて、かなり明るくなつた話です。w

次、キンセツシティ VS シダケタウンとなります。

シダケタウンはバ  
ゲフングエフン。変わり者を集めたメンバ  
ーにしています。でも、試合自体は1話で終わつてくれる助かる  
なあ。w

ゼウス

「先月更新してないよね」

え？ ナンノコト？

ゼウス

「先月更新してないよね」

いや、だからナンノコト？

ゼウス

「先月更新してないよね」

うん……だから……その裏がありそうな満面の笑みは止めてよひよ  
つ、

ゼウス

「ぶつ殺す」 アイアンテール

ンゲホツ

……倒

スピカは呆けていた。確かに、ゼウスは強い。彼の実力は筆舌には到底尽くせないほどだ。だが、これはあまりにも酷い。何が酷いって、シダケタウン代表との試合、第1戦目はゼウスと、ファルカリというフシギダネとの試合だった。その試合は、僅か10秒。ゼウスの勝利だった。

第2戦目はスピカと、ヘンレといつらじいゼニガメとの試合だった。

「さてさて、準備体操でもしておくかなつと」

スピカはそう言つて、6本ある脚を順番に伸ばし始めた。その後、2対2と3対2の足の間を捻る。そつそつすりぬり、戦いの時間はせまつてくる。

『お待たせいたしました。第2戦目はスピカ選手対ヘンレ選手の試合です』

解説のポケモンが言つた、その瞬間、観客席から轟音とも言つべき歓声が響いてきた。一匹一匹のポケモンの声が結束されて、さながら音の束となつたようだ。

「うーせーなあ、つたく」

「ははっ、オイラの相手はその見るからに弱そつなレディアンか?」

瞬間に、ヘンレは見下すように顎を反らし、目を細めた。だが、スピカはそれが“挑発”という技の一つだと知っていた。

「……見下していろつもりか？ 稚拙なやつだな」

そう言い返すと、ヘンレが怒りで顔を醜悪に歪めた。だが、その後にスピカのマッハパンチが向かう。

「つ、殻に籠る！」

ヘンレが使つた技は、惜しくもマッハパンチを防ぎきつた。さらに、高速 спинを繰り出す。

ギュルルルルル！！ と音がして、ヘンレは宙を舞う。辺りの空中を徘徊しながら上下している。絶えず動いていて狙いを定めにくい「ここ」の上ない。だが、スピカは動いた。

「そもそもしてりや攻撃できないと思ったか？ 浅はかな奴だな。  
シルヴァー・トルネイド  
銀色の竜巻き！」

瞬間、鮮やかな銀色の旋風が広がる。ヘンレは、風に流され、スピカの思いのままに流される結果となってしまった。スピカは風を止め、空中で静止したヘンレに虫のせめきを放つ。

「ぐああつー」

甲羅の中から、ぐぐもつた断末魔が聞こえた。殻に防がれて、致命的なダメージは与えられない。だが、攻撃しつづけていればそれにも相応するものになるはずだ。勿論、ヘンレの反撃も想定していた。

「くそ、水鉄砲！」

ヘンレは顔のみを出すと、水を発射した。スピカはそれを体を回すことによって難なくかわす。

「ほりよつ、お前、わざまで俺のことを見るからに弱そうと卑下していたのは何だ？ 攻撃一つすら当たられないじゃないか」「つ、まだ戦いが始まつて5分と経つていないだろ？」「！」

挑発を返されたヘンレが怒つて走つてくる。だが、それこそスピカの思つ壺

とは、流石に行かなかつた。

「冷凍パンチか……ふん、厄介なものを使いやがるな」

飛んできた打撃を脇腹に感じながら回避したスピカは、その冷気からそれを予測して顔を歪める。ヘンレを見ると、いかにもしてやつたりという感じの顔でスピカを見ていた。スピカは気にせず、拳を固めた。そして、拳が届きそうにもない場所にいるというのに、それを振るつた。

「！？ 田が……」

そこから放たれた光。今のはフラッシュだつた。光は一瞬で収まつたが、その場にスピカはいなかつた。

「なつ……テメエ、何処へ行きやがつた！？ 隠れていいで出て来い！」

「高速移動で上空に上がり、地面へ落下する。

「俺は！」

顔に当たる風の心地よさを感じながら言い返す。

「それじゃ、隠れてなんかいない」

ゼニガメは、引き攣った顔で空を仰ぐ。

「はつ、喰らいな。マッハパンチ！」

右拳に痛みが走り、皮膚が破れて血が滴り落ちる。

「咄嗟の判断で殻に籠るか……なかなか反射神経だけはあるんじゃないか？」

“だけ”の部分のみをやけに強調して言う。ヘンレは、それがスピカの罠と悟ったのか、今度は表情一つ変えることすらなかつた。

「舐めた真似をするなよ？ アクアジョットー！」

水を纏つて突進してきたヘンレを、スピカは高速移動で後退しない。途中、虫のわざめきを放つが、ヘンレも、それをかわしながら向かってくる。

「上だつー！」

壁際に追い詰められたスピカは90度方向を変え、上空へ舞い上がり、ヘンレが壁に激突し、停止する。

「痛え……」

頭を抑えながら立ち上がるヘンレ。だが、足元が覚束ない。壁にぶつかる寸前にスピードを弱めていたようだが、頭を強く打つたといつのは変わらないのだろうか。

「悪いな。俺は前職が前職だから、あまり情けを持ってないんだ」

高速移動で即効舞い降り、拳でヘンレを吹き飛ばすスピカ。そして、羽に力を籠める。

「（く、くそおつー）」

ヘンレは声にならない声を出す。だが、抵抗にはなりえない。四肢を動かすことはできず、拳に飛ばされ、空中を漂っている今では、地面を殻に籠つて滑ることも不可能だ。

耳に響く、戦闘終了の合図。

「お前の健闘を祝おう。虫のためめき」

爆発音を聞いたのを最後に、ヘンレの意識は闇の中に吸い込まれていった。

Legend...28 非情なる空の舞手（後書き）

スピカ

「久しぶりだつてのに短いな（汗）」

「ごめん。集中力が尽きた。」

スピカ

「いやいや、たつた2000件で済むんだよ」

さて、それでは一ヵ月間…どうに達しますね。

シート一

「作者の小説か」ここまで続くとは思わなんだ。途中で削除されるんじやないかと思つてたが」

失礼な  
；

ジオード

「いやお、社説はできないと思ひがたて、一年に纏めてのにはたてた30話。お前が書いた別の小説では9か月で80話いつてたしな」

テイン

差別？

「差別だな」

# 差別じゃない！ 区別d（撲殺）

ジヤード

「よし、邪魔者が消えた所で（ ）始めるか」

ティン

...スター卜

「うわあ、スピカさんかっこよかつたですー」

試合が終了した直後の観客席。アステリアーゼが呟いた。パフィーがふすっとした表情のまま呟いた。

「もうお昼……あれ、空が曇ってきたわ。さつやと向處かのレストランに行つて何か食べましょ」

「……了解」

「分かったですー。ならゼウスを呼んで……あれ、ジャード？」

アステリアーゼは、そこにいるべきポケモンが1匹欠けていることに気が付いた。

「あれ、ジャード……何処行きやがったのよあの馬鹿」

パフィーは不機嫌そうな表情を崩さずに辺りを見渡して、さながら愚痴を零すように呟く。だが、そこにくるティインのツツツツ!!。

「少なくともパフィーよりは頭は良い」

哀れなブイゼルの少年は、パフィーの耳パンチを受けのた打ち回つた。

「……シェルダナ」

キンセツシティヒシダケタウンとの試合が終了した直後のこと。ある場所では暗雲が低く立ち込め、今にも雨が降りそうだった。そんな中円柱型の高台の上で佇む、暗雲と変わらない色をした4足歩行のポケモン。彼の頭を覆うヘアバンド。鋭い眼光が、その名を呼んだ者を刺す。彼はレントラーという種族だった。

「……貴様、レナターか」

シェルダナの名を呼んだのはレナター。12、3歳ほどの外見にそぐわぬ威厳をその体に秘めている。だが、シェルダナはその威厳に臆することもない。

「ヘタレな炎の王様、何のためにここまでその狐をここまで連れてきたんだ?」

刹那、ヘアバンドから嘲りの声が発せられる。幾分猛々しさが籠り、声の持ち主が戦国の豪傑のような性格であると暗示している。

「貴様を正しに来た。それだけだ」

「暗黒の剣の總統である貴方がこんな所で一匹で佇んでいるなんてね。私としては絶好のチャンスでしかないでしょ?」

白炎とレナターが、声に負けじと強気な表情で言った。

「シェルダナ」

「分かつてると、黒雷。俺は裏切り者にや負けはしねえ。逆に、奴等を惨めな姿にしてやる」

「ほつ。捷に背いた裏切り者が我等を打ち負かすときたか」

やけに高ぶつているシェルダナに、白炎の遠雷の如き声が突き刺さる。しかし、シェルダナは余裕の笑みを崩さない。

「今の状況下では、裏切り者はお前達だ。暗黒の劔に深手を負わせた恨み、忘れはしない」

構えるシェルダナの周りで、電気が火花を散らす。それに対して、レナナーも背中で灼炎を燃やす。

「ほう？ 僕と相まみえると言つのか？」

「1対1なら貴方と私は互角でしょう」

レナナーの言葉を聞いた瞬間、シェルダナは高らかに笑い出した。永遠の言祝ぎをレナナーと白炎に捧げるように。

「お前、俺が1匹で来たと思つたのか？」

「……」

「俺が1匹でここにいれば、お前は絶対俺を狙いに来る。それくらい、分かつてたよ」

レナナーは精悍な表情を崩さない。シェルダナの言葉が指す意味を理解しても、レントラーは、尻尾を振り上げる。その瞬間、嘲笑う表情を見せたのは

レナナーだった。

「可哀そうね。私だつて、1匹で来たなんて一言も言つてないわよ  
「何！？」

シェルダナに加勢するべく、崖下から現れレナナーを取り囲んだ

ポケモンに、10万ボルトが突き刺さる。

「何者だ……！？」

「コイツなら、貴方が呼びだしたポケモン何て屁でも無いわね」

10万ボルトの発生源から電子が集結して、パソコンの画面にでる「ラウザのよつたデータをいくつも作りだす。

「レナテーに『暗黒の剣の総統に会わせてやる』と言わられて来たが……」

そのラウザは何かのデータを表そうと目まぐるしく動く。気付けば、周囲は黒に緑の線を引いたいかにも別次元のような空間となっていた。

「あんなどす黒いえげつなぞうなレントラーだとはな」

そのうち、ラウザ同士が集結し合つて、形を変えた。

1匹の電気鼠ポケモン。

種族はピカチュウ。名前はジャード。時空超越者の異称。その目は鋭くとがつた視線を放つている。

「貴……様ツ！」

「シェルダナ。觀念するか」

白炎が嘲るようにシェルダナに呼びかけるが、勿論まだ勝負が決まってすらないのに、降参などする気は毛頭ない。彼の体毛が逆立ち、高電圧を生み出す。電気が散らす火花がシェルダナの頭上で一点に集結する。やがて火花は変形し、Xの形をとつた。同じように、レナテーの頭上でもXの形をとつた紅蓮の劫火が浮かんでいる。

「…… 時空歪曲」

ジャードがレナターの後から出てくる敵を、時空の狭間で作られた竜巻きで吹き飛ばす。竜巻きはジャードの掌でサッカーボールサイズのものが生成され、彼がそれを地面に放り投げると竜巻きは一気に空へ伸び、敵を吹き飛ばす凶器となる。竜巻きはポケモン達を幾つも吹き飛ばす。

「あめえぞ、雑魚共。数で俺を圧せると思つたら大間違いだ

と、後ろから光が強く放たれた。

レナターの頭上で輝く炎とショルダナが掲げる雷。それぞれXの形をとつたそれらは、互いにぶつかりあつた。両者の距離は20m。その距離を白蓮と黒碧が埋め尽くす。

「クロスサンダー！」

「クロスフレイム！」

なんだと！？

ジャードはその技の名前に驚嘆を覚えながら、その手を緩めない。時空をも操る脅威で向かい来る敵を薙ぎ倒していく。

パфиー

「そう言えば聞くところによると、作者」の小説が終わった後の続編も考へてるらしいわ」

アステリアーゼ

「え？ 時旅だけでこんなにダメダメなのに続編なんていけるですか？」

ゼウス

「多分……いけないと思つた。その続編を書いてる途中で受験が始まりそうだし」

パфиー

「それは十分ありえるわね（汗）」

……しくしく。

パфиー

「あ、いたのね」

## Legend...30 大いなる力を解放して（前書き）

（前書き）

ジャード

「放置」 右手には包丁を

いや待つて、まずは右手に握りしめていたそれを床に置いておいた  
るかな ガクガク

ジャード

「置いてもらえるかな、じゃねえよ。前回の更新から3週間も経つ  
てるだろが馬鹿」

うん、まあね、忙しいわけよ。

ジャード

「お前、手際は良いと血運できるんじゃないなかつたのか」

そりや限界くらいはあるかい。こやね、これでもまだまぢま執筆はし  
てたんだよ？

ジャード

「さうか。じゃあ刺そつ。何故ちまぢま執筆していく更新できない

馬鹿」

（つ・・・）つ

ゼウス

「逃げた……」

レナテーとショルダナが戦う円柱型の高台は、側面に20メートルほど低い高さの円柱がもう一つ控えている。レナテーに襲う予定だったポケモン達はそこで時空超越者であるジャードによつて蹴散らされる。その小型の高台の上で戦つていたジャードの耳に、彼を驚かせる言葉が流れ込んできた。

「クロス……だと？」

ジャードに悠長に考えている暇は与えられなかつた。伝説の2匹しか覚えないはずの技を、ロコンとレントラーという種族が覚えている、というのは奇妙奇天烈だ。だが、目の前には幾多の敵が迫つている。ジャードは思考を止め、頬を帶電させた。そして、一気に電撃を放つ。

「10万ボルト！」

ラッタが、オドシジが、ゴーリキーが、倒れていく。ジャードは、右手をかざすと、今の一撃で怯んだポケモン達に向けた。

「スパイ  
輪廻！」

周りの風景が空の色のままマーブル状になり、立体響音が響く。次の瞬間、マーブルの背景がいきなり止まり、辺りは輪廻発動前の風景に戻つた。しかし、ポケモン達の足元には地面がない。地面まで、およそ数100メートルの距離がある。さつきまでいた高台は遠く向こうにあつた。

『あの野郎、俺達に何しやがつた！？』

『どうでもいい！ 今は助かることを考へろ！』 そのまま落ちたら待つのは死だぞ！』

『よし、皆！ 近くにいる飛行ポケモンに掴まれ！』

ポケモンの内の1匹が指示を出すと、周囲のポケモン達も動き出した。だが、不幸にもこの集団の中に飛行ポケモンはエアームド1匹しかいない。

『お、おこりよつ、待て！ 俺に捕まつても飛べるはずがぐええ！』

エアームドは最後は首を絞められたと思しき断末魔をあげた。結局、皆地面に叩きつけられる結果に終わった。

「さて、アイツらを見てもお前たちは俺に突っかかる勇気があるか？」

ジャードは、滝のように大勢で地面に叩きつけられるポケモン達を示唆しながら、また田の前に現れた十数匹のポケモン達に心理作戦の「」とく問い合わせる。

「……無いみたいだな」

「ある。俺達は總統様から見合つだけの報酬を貰つてはいるからな」

だが心理作戦は見事に外れ。それを知ったジャードはフラットな表情を作る。その顔は、これから発する声に起伏の無いことが恐ろしく感じられる。

「愚劣だな、命を捨ててまで富を求めるとは」

彼が手をかざすと、眼前にいたポケモン達は一瞬舞い上がり、巻きによつて吹き飛ばされた。

「抱く神器に宿した、神といつ名のポケモンの力を借りるくらいの力は持つていたといふのか」

シェルダナは嘲笑を声に混ぜ、見下したよつに言った。それを見たレナターは、彼の愚かな一面を見た、と顔で表現した。

「阿呆ね。私の力を見くびりすぎていたの？ そこまで私を見下していたのなら、思わぬ一手を打たれるなんて思つてもみなかつたんでしょうね」

「案ずるな。お前が時空超越者を連れてきたこと自体、俺にとつて予想できなかつたことだ」

シェルダナは一息ついて、更に呟つた。

「思いもよらぬ戦力が手に入るのだからな」

一線、沈黙が突き抜ける。レナターは、その言葉の本意を理解してそれが笑えるものだと感じたのか、フツと鼻で笑い、口の端を持ち上げた。

「貴方、ますます愚かね。ジャードが暗黒の剣に加入するとでも思つてゐるの？」

「お前が暗黒の剣が悪の組織であると時空超越者に教えていなければな。尤も、教え込んでいても、洗脳技術には欠けないが」

シェルダナの自信も、レナターの自信も相手に劣らない。だが事実として、ジャードがゼウスの過去を知つて、ヴォイスマンのことを知つたことをシェルダナは把握していない。レナターは、シェルダナの言つ洗脳技術など端から信じていない。互いに、ハッタリのかまし合いを続けていると信じているのだった。

「それはどうかしらね……碧い炎！」

レナターは、炎の翼ラフラム・エスキヤードで遙か後方に下がる。そして、翼は彼女を包み込んだ。その瞬間、紅蓮の炎は、蒼碧の炎となつた。

「ふん、雷撃！..」

シェルダナは、一跳び後方に引き下がつて、宙に浮いて吼えた。その瞬間、空を裂く轟音と共に巨大な電気エネルギーが彼の周囲に発生する。

碧い炎。雷撃。炎、電気両タイプの中で最大級の威力を誇る技が、激音を伴つて激突する。

「厄介だな……」

「お前、俺達を殺すんじゃなかつたのか？」

ジャードの顔には、少し疲弊の色が見え始めてきていた。いかん

せん、敵の数があまりにも多い。

「……お前の上半身と下半身を逆向きに回して棒で串刺しにしてやつても良いんだが、今の言葉は撤回しないんだな？」

ジャードが苛立ちを覚えて脅しの言葉をかけると相手のサワムラはポケモン達の影に隠れた。それを見たジャードは、つまらなさうに息を吐く。相手が时空超越者であることは薄々知っていて、それがハツタリでないと察しているのだろう。

「つまんねえな……。足搔くなよ、ヘタレが」

彼はそう言つと、手をかざして、エスケープ时空飛翔で敵の軍勢を吹き飛ばそうとした。だが、その瞬間、

「つまらんのはお前だよ。一度ぐらりと本氣出して戦つてみなつての」「？」

ディアルガから覚えない批評を浴びた。何故そうなつているかも分からず、时空飛翔を取りやめる。その瞬間に飛びかかってきたアブソルをアイアンテールでいなしながら

「お前は感づいてないのかもしれないけどな、御前が使つてる力は俺のその1パーセント程度だ。本来なら、俺が覚えている技もお前は使えるんだからな」

「それならそうと早く言つておけ」

ジャードが若干据わつた顔をしながら言つと、ディアルガはあまり悪びれていない口調で謝つた。

「おー悪い悪い。ま、今のお前は『ドランクロー』くらいは使える筈だから確かめてみな」

「ふむ……」んな感じか?」

ジャードは雷パンチを繰り出す要領で、右手のエネルギーを操作する。すると、炎のよじに蜿々と渦巻いた紫の爪が4本伸びた。

「ドランクロー!」

その腕を振り、目の前にいたオノンドを薙ぎ倒した。その瞬間、横にいたピジョット、テッシード、キングラーに向かつて波動弾を放つ。3匹がいた場所で爆発が起こり、3つの影が吹っ飛ばされるのが見えた。

「……他、何が使える?」  
「あん?」

ジャードの消えゆくよつな小さな声での間に、ディアルガはどこか倦怠感を帯びた声で訊き返す。ジャードは多少焦りを覚えながら言い返した。

「他の技、何が使えるんだ」

「ドランクローと波動弾以外か。えっと……原始の力と……」

最後にディアルガが言った七文字はとても小さく、ジャードも気をとられると言ひきとれない程だった。だが、意識の大半を注ぎ、その上で対峙する敵にも注意を注ぐ。

「……そうか、なかなかの業物揃いだな」

「はつはつは、パルキアと並ぶ伝説なんだ。これくらい誓われの範疇

じゃねえよ

ジャードは、ディアルガの軽薄な声をBGMに、原始の力を放つ用意をする。右手を前に出し、力を籠める。右手に、光の塊が集まつていく。

「負けるかあ！」

ドライトスが、彼の前に地震と地面に落ちた時の轟音と共に落ちてきた。ドライトスは、一度ジャードが放った原始の力をも受け止める。

「何つ！？」

「地震！」

瞬間、地面が揺れてそこを衝撃波が走る。地面タイプを苦手とするタイプは少なかつた為、相手への損害は大きくなり。ジャードへの損害は好ましくないほど大きいが。

「ぐああつ！」

衝撃波に当たつて吹っ飛ばされるジャード。相性と、ピカチュウの防御力の低さもあってか、痛みはかなり激しい。

「岩雪崩！」

飛行タイプ故に先の地震の余波から逃れたブテラがジャードに巨大岩石の塊をいくつも飛ばす。それは、立て直そうと何とか立ち上がりかけているジャードに、流星の滝の如く雪崩れ込む。

「……やつた、か?」

数秒後、ピクリとも動かない岩の山を見てポケモンの軍勢の中の1匹が呟く。

「そう、みたいだな

他の1匹が相槌を打つた。そして、敵のピカチュウが完全に倒されたと確信すると、次の敵 白炎といつもレナティーに向かう。しかし、

「うぐぐ……」

「おいおい、情けねえなあ

「黙れ」

ディアルガの残念そうな声を遮りながら、ジャードは岩の山の中でつめき声をあげた。そして、手を離すと自分に圧し掛かってくる岩を2本の腕で必至に支える。

「お、重い……あの技でどかせるか……?」

「あの技? ああ、あれか……あれ使つたらこいつ一帯のやつらは吹き飛ばせると思つが」

それなら大丈夫だ、とジャードは“あの技”を使う用意をして、ふと心配になる。

「俺に帰つてくるリスクは大丈夫か?」

「あ? ああ、大丈夫。実際に技使つてるのは俺で、御前は俺が

使う力を対象にぶつける端子みたいなものだからな」「そうか。だから、技の追加効果なんかは俺じゃなくお前に帰つてくらつてことだな」

ジャードはペンダントの中の「ティアルガに言つた。半ば確認をとる意味で。

「まあそういうことだ。リスクとしちゃ一定時間お前は俺の力全でを使えなくなるつすことかな」

「ティアルガが答えたのを皮切りに、岩の山の中に沈黙が訪れた。ジャードが、ティアルガが“あの技”の用意に取り掛かっているのだ。

「準備はいいか？」  
「いっでもどうぞー」

OKのサインを出されて、ジャードは背を支える格好のまま身の内に秘めた力を解放する。

「時の咆哮」

## Legend: 30 大いなる力を解放して（後書き）

ゼウス

「……あれ？ 僕の出番は？」

うん、ごめんね； 次はゼウス side でいく……と思つから。

ゼウス

「推測形でくるとこが怪しい……（ジトッ）」

……；

## Legend・31 結末は（前書き）

不調を押しきつて書いたのが間違いでした。今回三本指に入りそつな駄作です。

ジャード

「始末してやる」

ちよ、待つて！ 今回本当に調子悪かつたんでいや、 原始時代に飛ばすのは勘弁し *t* (ry)

レナテー

「Legend・31 楽しみなれい。……いや、 作者が作者だから無理ね」

「はあっ！」

シェルダナが放つ雷撃に、レナナーはかわす以外の対処法を持たない。

「うぐう……」

何故なら、シェルダナとレナナーの技の威力に違いがありすぎるからだ。無理に青い焰をぶつけて対処しようとしても、雷撃の力の方が上回っているが故、打ち返すことができない。

ジャンプして、雷撃を紙一重でかわしたレナナーは火炎放射を放つた。しかし、それはシェルダナに容易くかわされる。

「ははっ、裏切り者の癖に弱いじゃないか。さつきまで大口を叩いていた態度はどうした？」

「う、五月蠅いっ！」

見下しながら言うシェルダナに言い返すレナナーの叫びは、気丈ながらも弱々しい。しかし、劣勢を敗北の言い訳には使わないレナナーである。ラフラム・エスキヤード炎の翼で上空に翔びあがる。

「ふうん？ 上空に逃げれば勝てると思ったのか。そつかそつか

シェルダナは悪鬼羅刹の顔を見せ、体を帶電させる。そこから、10万ボルトが伸びた。レナナーは身を翻してそれをかわし、自分の周囲に幻覚を作りだす。神通力である。幻覚は、シェルダナから

見て歪んで見えた。神通力は、歪みを見せて相手にダメージを与える。しかしシェルダナには通用しなかつた。彼はチャージビームを放つ。

「レナテー、避ける！」

白炎の、幾分焦つたような声が響く。それに応答えるかのよう<sup>じた</sup>、レナテーは身を横にずらした。耳元を、光線が突き抜けてゆく。シェルダナは、更に2、3発チャージビームを撃つた。それからの逃避として、レナテーは空をどんどん上昇していく。周囲の景色が上から下へとスクロールし、遠くにあつた雲が、近づいてくる。チャージビームは横に反れた。下を見ると、さつきまでのバトルフィールドは小さな点になっていた。そこから、炎の翼に変化が起こる。

炎の翼はとぐろのよつて渦を巻き、レナテーに纏わりつく。元来炎タイプである彼女は、熱いなどとは一切感じない。

そして、今度は急降下した。最高神が天罰として振り下ろす拳のよつて、紅蓮の塊は一点のシェルダナを確実に狙つて音速で降りていぐ。炎が引いた尾は、直進の余韻として仄かな温もりを残した。

「……それで俺を狙う氣か。……いいだろ？、機は熟したな」

シェルダナは、禍々しいほどの視線でそれを突き刺した。彼の体の周囲で電撃が炎上する炎のように弾け飛ぶ。それは始めは青白く、しかし若干の間を得て漆黒に光り出した。

「これより、雷撃君臨を行つ」

そう言つた彼の頭から、ヘアバンドが抜けて宙に浮いた。シェルダナの放つ電撃の幾筋かがそれを貫いて、そのたびに黒いヘアバンドは禍々しい光を放つ。そして、ヘアバンドはその光を更に強めていく。

「古の英雄よ。汝我に力を示しこの一点に大いなるとして君臨せざとすれ」

発せられる度に言語としての成立が消えていくシェルダナの呪文を反映するかのよう、光は数秒と経たないうちにあるポケモンの形をとつた。一本足で立つ巨大な龍。それは実体と化した。闇を内に秘め、雷を行使して戦い続けて勝利を收め、それ故に自身こそ黒雷と呼ばれる、数大なる伝説のポケモン。

「……黒雷が顯現したか」

白炎の遠雷さながらの声が轟いた。それはレナナーに、自分をこの世に召喚するよう言外に命じていた。勿論、レナナーに拒否理由などない。あつたとしても、白炎はそれを許さなかつただろう。

「劫火、翔炎。ただいま始動」

その瞬間、レナナーの右耳に結ばれていた一条の純白のリボンがほどけて宙を舞つた。彼女の炎の翼の中でも燃えなかつたそれは、今でこそレナナーが炎を吐くことによつて点火している。だが、それを燃やしているのは紅蓮の炎ではない。目を覆うような純白の炎

だ。

「今この場に姿を現せしどき、我この優劣に従いなん。然るに発現せんとせよ」

互いに知らぬものではあるが、レナテーの呪文はシェルダナよりは幾分か整った単語の羅列である。そして、その言葉を言霊よろしく吸収しながら白い炎はあるポケモンのシリエットとなつた。その後、炎が散つて現れたのは色も変わらぬシミ一つない美しいポケモンだつた。かつて、神話にも存在したポケモン。

「レシラム、行くわよ」  
「ゼクロム、出撃だ」

黒と白、二つの力が競り合つ。シェルダナはその脚で、強く地面を蹴つてレナテーを迎撃つために飛び上がる。それを、ゼクロムが先行した。

レナテーが速度を落とし、レシラムが白翼をはためかせた。彼女はレシラムの力を最大限利用するため、さつきまで行つてい、炎<sup>ム・エスキヤード</sup>の翼による炎を纏つた突撃を止めざるを得なかつた。シェルダナが雷撃君臨を行つたことによる一つの誤算である。レシラムは強い。そんな誤算など覆す程に、しかし、ゼクロムも引けなどとる筈も無い。

「クロスサンダー！」  
「クロスフレイム！」

雷が電撃音をたて、炎が轟と燃え盛る。

ここで、勝敗を決めるのは何であろう。ゼクロムとレシラムの力量差か？ 否、2匹は対する伝説のポケモン。差など微塵も無い。

元来、ロコンとレントラーは種族的に見てレントラーの方が勝っている。これは即ち偏見であるが。しかし、同じ鍛え方をして強く育つのがレントラーの方であるのも事実。つまり、神なるポケモンをその身に秘めたとき、その力を多く引き出せるのもレントラーとなる。

「痛え……」

瓦礫が辺りに散乱する中、ジャードは身を起こした。上では、レナテーとシェルダナの戦いにより爆発が起き、号音も轟いている。先にディアルガの技により、彼の力を使えなくなってしまったため、今敵に襲撃されると非常にまずい。だが、目の前の崖から何かが這いあがってくる気配をジャードは感じない。とりあえず、石で強打して痛む腰をさすりながらレナテーが戦っている筈の上方を見上げた。

「……何？」

その時、彼は見た。ロコンの少女が赤い尾を引きながら落ちてくるのを。

「レナテー、危ないっ……」

前方に、僅かジャードの手が届かないと思しき場所に落ちたであ

ろう彼女を、ジャードは慌てて抱きかかえた。赤いので分かりにくいのだが、体のあちこちに傷と思しき線が描かれ、血が滲み出ている。右耳のリボンは、蠟燭の火のように優しく燃えている。ジャードは、レナターがシェルダナに敗北したと悟った。

「おい、どうした？ 何があつたんだ！？」

「う……うぐつ……」

「単純な力量差で奴に負けてしまった。それだけだ」

力を大幅に消費し、喋ることのできないレナターに変わつて白炎が答えた。敗北という事実が彼の遠雷のような声に含まれていた。何と言うことだ。自分達は暗黒の剣の頭領を討つ為にやつてきたのに、帰り打ちにされたのか。レナターは絶対に勝つと確言していたのに。

「丁度よかつた。ここで時空超越者と白炎、共に始末してやるよ」

「シェルダナ、テメヒつ……」

「おい、やめておけジャード」

力むジャードを、時の咆哮の反動から回復したディアルガが制した。闇の帝王ともいえる者を早く倒しておきたいというジャードは、焦りからペンドントを睨みつけた。

「お前がシェルダナにつつかつていったとしれ、レナターはどうするよ？」

正論を浴びせられた。それが直感で分かったジャードは、攻撃をとりやめた。敵は既に電撃を放つ用意を完了させている。

「分かつたよ」

ジャードは不満げな鼻息混じりにそつ答えると、右手と左手を前に出し、即座に波動弾を打ち出した。不意を突かれたらしいシェルダナは溜めていた電撃、チャージビームを打ち出した。その隙に、ジャードはレナターを抱えて飛び上がった。

「よし、こままバトルリーグの会場に向かおうか」「お前に指図されるのは気にいらないが、そうするか」

ディアルガとジャードはお互いに言い合いながら飛行を始めた。シェルダナが追うようにチャージビームを放つたが、時空超越者としての力をそれにぶつけた。チャージビームはいつとも知れない時間に飛んでいった。

ジャードは前かがみになつてレナターを背負い、その姿勢のまま飛行を続けている。背中の上でぐつたりしたレナター。彼女を見守るよう、白炎はボロボロのリボンの姿に戻つて彼女の耳にずっと巻かれている。

## Legend : 31 結末は（後書き）

今回文章と文章に対句法を用いてみました。

ジャー<sup>ド</sup>

「みました、じゃねえよ。場面転換一回も行われてないのになんでいつも場面が何回も変わつてますよ的な感じの表記になつてるんだ」

うん、不調だつ<sup>t</sup>（<sup>r</sup>y

ジャー<sup>ド</sup>

「言<sup>こ</sup>訳<sup>こ</sup>」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5932n/>

---

時の旅人

2011年10月27日02時17分発行